
世界で最後の魔王が泣くとき。

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で最後の魔王が泣くとき。

【Nコード】

N1615BA

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

超能力者・雨宮新道率いる桜桜高校オカルト研究部メンバーは、一年前のある日、魔法が存在する異世界へと漂流してしまった。右も左もわからない一行を助けたのは、魔王を名乗る白髪の少女マナ「ファントム」。やがて世界で最後の魔王として公開処刑される、優しい魔物の王だった。

プロローグ

世界で最後の魔王は今、たった一人で城を守る結界を張り、敵軍からのやまない猛攻をギリギリで凌いでいた。

かつての仲間たちは、どこにもいない。

完全敗戦してしまう前に全員、国王軍側に寝返らせたからだ。

戦争の勝敗が決した時、どちら側にいたかで、後々、個々の処遇は大きく変わる。

だから、長年この城に仕えてくれた者たちは例外なく、問答無用で忠誠契約を破棄させた。

魔王として最低な行為だったが、後悔はしていない。

もしかすると、現在こちらに攻撃している中には、元部下がいるのかもしれない。

国王軍側に『負け戦だと分かって主を裏切り、反旗をひるがえした魔物』と認識されている以上、信用を買うには仕方がないことだろう。

かつての主に攻撃することで、彼らが生き延びられるのなら、これ以上に喜ばしいことはないと魔王は思った。

ここから先は、人間の時代が始まる。

そうなれば中立の魔物たちの立場さえ危うくなるだろう。

どうにかして、上手く生きていく術があればいいのだが、きっと困難を極めるはずだ。

魔物は今までのように自由にはいくまい。

（余の魔力も、もってあと二分か）

祖父の代から一〇〇〇年以上も続いた歴史ある魔王の古城も、じきに陥落する。

魔王とは言え無敵ではないのだ。

一体分の魔力では、せいぜい城外を包み込む結界一枚の展開が限界だ。

四方八方から降り注ぐ攻撃に、迎撃術式までは構築できない。

籠城作戦は、時間の問題と言えた。

魔王が城内の塔から黄昏時の空を見上げれば、闇色のドラゴンにまたがる空属——通称 カース が飛行している様を確認できた。まるで死傷を負った獲物が息絶えるのを待つタカのように、遙か上空をグルグルと旋回している。

彼らは、空を愛したがゆえに太古の呪いを受けた五人の空属だ。

ただし、人間としての原型はほとんど留めておらず、下半身はドラゴンの背中と癒着している。

そして上下関係で言えば、人影の方がドラゴンの下僕にあたるのだ。

一人人がまたがれる程度の全長を持つドラゴンは、しかし生物的な外見をしていない。

確かにシルエットだけは立派なドラゴンなのだが、まるで地面に映る影が二次元的な質量を得て立ち上がったみたいに、体の構成物質は霧状のまがましい闇でなっているのだ。

それは液体、気体、固体、いずれの性質にも変化できる、暗黒色の魔法物質。

それは、かつて魔法使いたちによる実験でモルモットにされた、ドラゴンのなれの果て。

それは、地対空迎撃術式の魔法でも殺すことができない、正真正銘の怪物。

そして、魔王の城を監視する怪物は、なにも呪われた空属のドラゴンだけではない。

古城の近海を見渡せば、海の怪物クラーケンを従える世界最凶の海賊 ベリアル の布陣が視認できる。

島一つ分の巨体を誇る化け物は水面下にも潜んでいるのだろう、

まだ姿を現していない。

当然、頭足類の巨大生物を飼いならしていることだけが、世界最凶の悪名を轟かせている理由ではない。

ベリアル の構成員三〇〇人全員が、手練れの魔法使いなのだ。そんな海賊たちが駆る船は、たったの一隻。

高度な魔法コーティングが施されている、ホワイトマーメイド号である。

魔王の古城と肩を並べられるほど大型の帆船で、白い外装のいたる場所に、あらゆる方角への追撃を可能とする砲撃術式を搭載している。

見た目からは鈍重なイメージを受けるけれど、印象を裏切るようかなりのスピードを出せる上に、魔法による潜水航海が可能らしい。

空域も海域も封鎖されている。

こういった調子で残された領域である地上にも、深淵の山族が構えていた。

鬼姫イースリィハザート率いる、人ならざるモノノケたち。

美しい女性ばかりしか生まれない鬼の一族である。

一見すると人間の女性と変わらない姿をしているが、魔力の総量、魔法の手数、驚異的な身体能力は、白兵戦において並の魔法使いとは比べ物にならないという。

こと戦闘においては一体一体でもかなり厄介な種族なのに、今回は総出で出陣しているようだ。

見えるだけで一〇〇体は確認できる。

もはや空も海も陸も、退路は絶たれている。

魔王の魔力も底を尽きる頃合いだ。

そうすれば結界は消滅し、彼らは即座に城内へと殺到するだろう。ただし、すぐに魔王を討伐するわけではない。

世界最後の魔王——マナ・ファントムの処刑は、全世界同時中継の公開処刑が予定されているからだ。

人間サイドの勝利を。

魔物サイドの敗北を。

マナの死でもって宣言する。

すなわち、拮抗していた世のパワーバランスを国王軍が完全掌握したことを人間側への証明とし、魔物側への見せしめとするつもりなのだろう。

そんな人間サイドの勝利が確定するまで、あと三〇秒もない。

そんなことはわかっていても、マナは最後の瞬間まで抗うことをやめなかった。

大切な時間を過ごした城を。

ここで紡がれた全ての思い出を。

たくさん生命が呼吸していた証を。

一秒でも長く、失いたくなかったから。

魔王になつてから、いろいろなことがあった。

決して少なくはない記憶の映像が、マナの脳裏をよぎっては消えていく。

（そう言えば、アマミヤたちは無事に戦火の外まで逃げられただろうか）

約一年前、マナの領土である樹海の中で出会った、とても不思議な少年少女たち。

（ちょうのうりよく、だったか）

魔法とは違う、彼らの世界の力。

もっとも、彼らの話によれば、この世界のように技術として体系化しているものではないらしいが。

（できれば、一緒に元の世界へ帰れる方法をさがしてあげたかった

が、それももう叶わぬな)

だからマナにできることは、彼らのために祈る神もないのに両手を合わせるくらいだった。

(すまぬ、父上、母上、皆のもの。余は——)

そして、時間は誰に対しても平等だった。
マナが心の中で謝罪を呟いた瞬間、

(——そなたたちの時間を守りきれなかった)

古城を守っていた不可視の障壁が壊れ——空から——海から——
山から——魔王の首を狙う者たちが一斉に押し寄せた。

∞ ∞ ∞

こうして。

国王軍による『世界で最後の魔王マナⅡファントム』の公開処刑は、明日、夜明けとともに執行されることが決定した。

第一章「オカルト研究部の超能力者たち」

夕刻時の樹海は、頭上の燃えるような茜空を意に介さず、一足先にほの暗い夜の色を招き入れていた。

界限に生命の音は聞こえず、不自然なしじまが澄みきった山の空気をぬっている。

アップダウンの激しい獣道は、およそ一年前、桜桜高校オカルト研究部メンバーが迷い込んだ場所に酷似していた。

けれど、ここは『彼女』の領地ではない。

全員、初めて足を踏み入れる未開の森林だ。

異様な緊張に押しつぶされそうになりながらも、彼らは足の動きをとめない。

「いやに静かですね」

移動のさなか、声のポリウムを殺して呟いたのは、オカルト研究部副部長の神無月玲だ。かんなつき・あきら

季節に関係なくいつも薄めの和服を着ている、容姿端麗の一八歳。かんざしを通した長い黒髪、みずみずしい白い肌、すらりとした無駄のない体つき、形のいい眉をハの字にして、たまにはにかなだ時の表情など、とても魅力的な少女である。

耳心地の柔らかい滑らかな口調や、人当たりの良い温厚な性格から、メンバー全員に圧倒的な信頼を得ている存在だ。

しかし普段の優しい目つきが、今は剣？な色をたたえて細められていた。

「そうですね。きっと、この静寂は意図的なものなんでしょう。お嬢さまの違和感は、ごもつともです」

左の腰に鞘を帯刀している少年が、辺りに注意深い視線を配りながら淡々と答えた。

桜桜高校の男子制服に身を包む彼は、オカルト研究部メンバーの霧墨きりずみ・えりあ絵利亜だ。

『神無月家』に代々執事として仕えている『霧墨家』の長男、一七歳である。

高くも低くもない声や、同年代と比べて華奢な体躯、幼少の頃には『女装が似合いそう』という理由で少々苦い思いをしているほど、中性的な容姿をしている。

霧墨は基本的に、主である神無月のことしか考えて行動しない人間だ。

神無月家、霧墨家以外の者にはぞんざいな態度で接したり、融通がきかないことが多々あるため、他のメンバーと衝突することも少なくない（オカルト研究部に所属しているのも神無月が入部していたからであり、彼の自由意思ではなかった）。

普段はほとんど表情を作らずに冷静な反面、短気で、神無月のこととなると普段の落ち着き具合からは考えられないくらい、周りが見えなくなるくらいがある。

現在も心の中はおだやかではないらしく、霧墨は時々舌打ちを鳴らしながら口早に、

「魔物たちは、息をひそめているんでしょう。近隣で国王軍による大規模な強襲があったのですから、無理ありません」

「い、いつ自分たちの住む森に飛び火するか、ま、魔物の方たちも心配、なんですよね……」

霧墨の温度のない言葉を聞いて、か細く声音を噛み噛みで発したのは、神咲かみさきみくるという少女である。

桜桜高校の女子制服を着衣している、オカルト研究部メンバーの一七歳だ。

明るいトーンの栗毛を肩の位置まで伸ばし、両サイドをピンクのリボンで結んでいる。

おしとやかそうな見た目通り、重度の内気で、人見知りが激しい。すでに一年の付き合いを越しているオカルト研究部メンバーに対しても、たまに照れを隠し切れず、目を合わせて話せないレベルだ。けれど、これでもまだ前進した方で、中学時代は引込み思案な性格が災いし、暗い女として女子生徒から忌避されていたという。

「要するに地元の皆さん、ピリピリと神経を張り詰めてらっしゃるわけだ。俺たち、けっこうヤベエとこ歩いてんじゃね？」

いささか楽天的な調子で発言したのは、宇佐川慎二、一七歳独身。こちらの世界に漂流するまでは、毎朝ワックスで髪型をキメて登校していた、我が日本を代表する中肉中背の青春男児である。

根は真面目で良い奴ではあるものの、底抜けに明るい性格ゆえに校内一空気が読めないウザ川と揶揄されたりしていたが、本人はまったく気にしていない。

そして、オカルト研究部メンバーの、とある少女にゾッコンラブしているDM男でもある。

「ていうかさ、雨宮。ちょっと交代しようぜ。俺だって充電中の神楽ちゃんをオンブして密着したいんだ！」

列の先頭を歩くオカルト研究部長と、その背で眠る少女に向かって、宇佐川はダダをこねるように進言する。

すると、宇佐川の比較的近くで徒歩していた霧墨が、残像すら置き去りにするスピードで腰の剣を抜刀し、

「黙れよ、宇佐川なんか。貴様の声がでかいせいで、魔物たちが寄ってくるだろうが。それでお嬢さまの身にもしものことがあったら、貴様はどう死んで責任をとるつもりだ？」

プロの殺し屋にも劣らない凄みの眼光と声質でもって、宇佐川の首筋に剣を添えた。

宇佐川は冷や汗をにじませながらバンザイのポーズで硬直し、口元だけで抗議する。

「ち、ちよつと霧墨氏？ 俺の責任問題の処理は、死が前提なのですか？」

「当然だ。これ以上の譲歩はない」

「えっ、譲歩してたんだ！？」

「だから大きな声を出すなと言っているだろうが、バカが！」

「なっ、失礼な！ バカとは何だバカとは！ こう見えて成績は悪くなかったんだぞ！」

「どうして言外に死ねと言われた時よりもキレているんだ、煩惱が！」

鼻息を荒くして、にらみ合う二人。

そこで霧墨の主である神無月が、彼の右肩をトントンと叩いた。

「霧墨くん」

霧墨ははっとなって剣を引き、振り向きながら頭を下げる。

「……ッ、すみません、お嬢さま。お見苦しいところを——」

「いえ、それどころじゃなさそうですよ、霧墨くん」

「？」

顔を上げ、小首を傾げそうになったところで、ようやく霧墨は、神無月が困ったような微笑を浮かべている原因を知った。

幼稚園や小学校の時、遠足で行った動物園。

そこで見た立派なトラよりも図体が三倍はある四足獣の魔物に、彼らは包囲されていた。

数は五体。

肉食獣さながらの緩慢な挙措は、獲物を追い詰めたライオンのようだ。

こちらとの距離を、円周軌道で確実に詰めてきている。

「あ、あれ……これ、まずくね？」

わずかに焦燥が混じっているものの、まだ能天気そうな宇佐川の言葉を皮切りに、オカルト研究部メンバーは一斉に背中合わせになって、なるべく互いの死角を作らない立ち位置に移動した。

「ああ、まずいな」

一七歳にして一七九センチの長身を誇る稲葉泉^{いなば・いずみ}が、低い声で端的に相槌をうった。

長めの黒髪と凛々しい顔立ち、スポーツでもしていそうな体格の少年である。

眉目秀麗な容貌で異性の気を引けそうなものだが、学園生活では

ひたすらに寡黙だったせいで、女子生徒はおるかクラスの男子すら彼に寄りつかなかった日々を過ごしている。

その日一日、誰一人として稲葉の声を聞かなかったということがあるくらいだ（決して無愛想なわけではないのだが、無口な態度から、『付き合いの悪い人間』と認識され、中学時代は友達が一人もできなかった）。

そんなルックスだけは良い稲葉が、『まずいな』と言った。

要するに、それだけのピンチな状況ということだ。

「めったに口を開かない泉くんが、そんなこと言うから、ほら黒乃くんが怯えてるよ?」

稲葉の幼馴染み・岸光きし・ひかりが苦笑いしている。

ボブカットの茶髪と繊細な顔立ち、『話しやすい美人』であることから、桜桜高校において一年男子より人気ナンバー1を勝ち取っていた一七歳の美少女だ（一年前の話だが）。

彼女は唯一、この中でオカルト研究部に所属していない一般生徒だった。

そんな巻き込まれ型美少女・岸光の視線の先には、彼女が口にした黒乃という名の少年がいる。

「うわぁ怖いよ怖いよ食べられちゃうって逃げようよ今すぐ逃げようよああでもどこに逃げれば良いんだろう困まれちゃってるしもう絶対絶命だよぉ」

とにかく気弱で、優柔不断で、臆病で、ネガティブ思考で、メンタル面がもろい一七歳の草食系男子・黒乃純白くろの・じゅんぱくは半べそになって頭を抱えていた。

紐みたいに細い体は、喧嘩もしたことがなさそうなくらいヒョロリとしていて、惨めに涙を浮かべている様子は女々しく、情けない。

「大丈夫だよ、純ちゃん。私がついてるから」

そんなダメ男子黒乃の手をとって握りしめるのは、彼の許嫁——
白瀬黒羽だった。

愛嬌のある可愛らしい顔立ちで、いつも笑顔を絶やさず、何事にもポジティブシンキングな天真爛漫少女だ。

不屈の心と、将来の婚約者への惜しみない愛情、意外と発育のいいボディで、ネガティブ黒乃を支えている良きパートナーである。

「く、黒羽ちゃん……」

天使のような笑顔を咲かせる恋人に励まされ、黒乃の瞳にも、かすかな希望の光が宿り——

「純ちゃん、安心して。心配しなくても私たちはずっと一緒だよ。一生側にいるから。魔物さんたちの胃袋の中でも、そこで消化されたあとでも、たとう。ちになっても、私たちは永遠に離れないよ」

——希望の光が消えた。

「うわああああああ嫌だあああああああう。ちはいやだあああああ——」

泣き叫ぶ黒乃の声に刺激されたのか、先刻よりも肉薄してきている四足獣の魔物が体勢を低く屈めた。

牙をむき出して、威嚇するようになる。

警戒だった獣の瞳が、明確な敵意に塗り替わった瞬間を直視して、
夢村しをりは青ざめた。

「だああああ、もううつさいわね！　こんな時にラブコメやってんじゃないわよ！　あんたたち状況、分かってんの！？　TPOを考えなさいよ、TPOを！」

『とある理由』で金色に染めた髪と、だらしなく着崩している桜桜高校の制服、その汚い言葉遣いから、社会より不良というレッテルを当たり前のように張られた一七歳の少女が、怒鳴る。

「黒羽、そのチキン野郎はやく黙らせて！」

「うん、任せて！」

「まだ死にたくないよおおおおおおお——むぐっ」

黒羽の大胆な行為に、場が凍りついた。

「ほら、純ちゃんってば、私がちゅーすると大人しくなるんだよ」

ニツと皆に向かって得意気にピースする白瀬の隣で、黒乃は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「……ま、まあいいわよ、大人しくなってくれたのなら」

若干、夢村が引いている。

こころなしか、四足獣たちも引いている。

「それで実際問題、どう切り抜けますか？」

隣に並ぶ神無月がそう問いかけてきたので、夢村は魔物たちの動

きから一秒も目を離さずに答える。

「あら、意外と余裕ね、先輩」

「そう見えますか？」

夢村の視界には映らなかったが、おそらく神無月はにっこりと微笑んだ。

途端、夢村は右半身に微熱を感じ取った。

気のせいではない。

命の危険を察して、緊張しているからでもない。

明らかに神無月という少女のせいだ。

「にしい、ねエ、夢ちゃん。いいのオ？ こいつら、ヤっちゃつて、いいのオ？」

夢村が必死になって状況を打破する計算を脳内で巡らせていると、今度は左隣で構えている超猫背少女が話しかけてきた。

夢村は半ば無意識的に応じる。

「独断専行はだめよ、桜。あんたは大事な主戦力なんだから、私の合図を待ちなさい」

「にしい、了才解イ」

ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、敬礼する月島桜。つきしま・さくら

深刻な寝不足が疑われるくらい、目の下のクマが半端ではない――七歳は、とりあえず色々と病んでいる女の子だ。

この月島と同等に世話が焼けるメンバーと言えば、

「……キテル？」

「——ウン、キテル」

片山右京と、片山左京の双子だろう。

いつも何もない虚空を凝視している一八歳の先輩姉妹である。
放置しておく、電波に導かれるようにフラフラとどこかへ行っ
てしまうような二人だ。

ちなみに、DNA爆発によって二人を見分けるには、ホクロを確
認する必要がある。

右頬に泣きホクロがある方が右京で、左頬に泣きホクロがある方
が左京だ。

それから、とっておきの奇人変人。

オカルト研究部の部室にくる時は必ず黒子姿で、いまだ正体不明
の存在——黒子さん。

体格からして男だと、夢村は推測している。

「って……あれ？」

「どうしました？」

背中を預けている仲間たちを肩ごしに素早く見渡して、ふいに夢
村は声をあげた。

神無月が怪訝そうに訊ねると、

「雨宮のクソが……いないわ」

束の間の、空白。

そして、

[illegible]

「どーりで神楽ちゃんの姿が見当たらなかったわけだ！ あのヤロ
ー、宇佐川慎二の人生物語におけるメインヒロインを横からさらい
やがった！」

「宇佐川くん、神楽ちゃん姿がない時点で雨宮くんもいないことに気づきましょーうよ。彼女を背負っていたのは、彼なんですよ?」

いきりたつ宇佐川に神無月が優しく語りかけると、霧墨が小さく舌打ちして、

「宇佐川慎二……つくづく使えない人間だな。魔物と戦闘におちいた際は、どさくさに紛れて偶然、僕の手元が狂い、この剣がすべて奴に刺さらないだろうか。努力はしよう」

「霧墨氏、霧墨氏、聞こえてるし、努力する方向間違えてるし、偶然という言葉の意味をはき違えてらっしゃいますよ」

号泣する宇佐川。

その一方では、夢村が悪態をついていた。

「いや、マジでどこに行ったのよ、雨宮のアホは！」

「い、いつ、食べられてしまったんでしょうか？」

「にししィ、さらにと愉快なこと言うねエ、みくるちゃん？」

「逃げたのでは？」

稲葉が眉ひとつ微動だにせず言うと、傍らの岸がフォローを入れる。

「泉くん、もうちょっと部長のこと信用してあげたらどうか？」

「まあ、奴は今いてもいなくても……むしろいたら足手まといだ」

「だからストレートすぎるよ、泉くん」

「……キテル？」

「——ウン、キテル」

「ちょちょちょ、ほんとにくる！ほんとにくるよ、ぎゃあああああ！」

黒乃がわめき散らしながら、前方を指をさす。

夢村がそちらに顔を向けると、先の皆の大声によって逆立つ神経を刺激された四足獣の魔物五体が興奮状態で、いよいよこちらに突進を開始したところだった。

∞ ∞ ∞

その時。

「仕方ない。宇佐川の血は、あとで吸わせることにしよう。お嬢さま、危険ですので下がっててください」

「だから霧墨氏、聞こえてるからね？」

宇佐川のツツコミも耳に入らないほど集中しているのか、霧墨絵利亜は無言で腰を落として、帯刀する剣の柄に右手で触れた。刹那、踏み込みの動作で重心を前方へと移動させる。その所作と連動し、霧墨は抜刀の要領で鞘から剣を引き抜いた。銀色の軌跡。

剣閃は、鋭い真一文字を描いた。迷いのない太刀筋。

威力も速度も申し分ない。

けれど、霧墨の剣が切ったものは空気だけだった。

魔物がまだ間合いに入ってきていないのだ。

——なのに、五体いる魔物のうち一体が、喉笛を掻き切られ、地面に血だまりを作って倒れ込んだ。

「悪いね、僕には間合いもタイミングも、あまり関係ないんだ」

霧墨絵利亜は——超能力者だった。

自らが放った斬撃を、任意の空間にレポートさせる超能力。離れた位置にいる標的も、タイムラグなしで斬りつけることが可能な力である。

無論、四足獣の魔物を一撃で屠れるほど霧墨の剣術は卓越していない。

超能力こそ有しているが、彼は魔法も使えないただの人間だ。ゆえに、全ては彼がたずさえている剣にこそ秘密がある。

「お見事です、霧墨くん」

『特性の剣』を鞘に収める霧墨を微笑で讃えながら、神無月は右腕を自身の胸の高さまであげた。

地面とは平行に、スツと音もなく五本の指を伸ばす。

そこで、神無月の目つきと雰囲気が一転した。
直後、謎の発火現象が巻き起こる。

炎の波が意思をもった生き物みたいに渦を巻き、一息に二体の魔物を食い潰す。

余波が神無月や霧墨たちの前髪を揺らした。

神無月の超能力——パイロキネシス。

その圧倒的かつ容赦ない火力に飲み込まれた四足獣は、一〇秒を待たずに息絶えた。

「お嬢さまも、素晴らしいお手並みでした」

霧墨が落ち着いた声で賞賛を口にする、神無月はいつも通り、綺麗な眉をハの字にして柔和にはにかんだ。

∞ ∞ ∞

その時。

残りの魔物は二体——いや、すでに一体になっていた。

「にししィ、大したことないねエ」

白目を剥いて泡を吹く魔物の背に、月島桜があぐらをかいて座っていた。

「あいつ、マジか……」

宇佐川が感嘆とも驚嘆とも取れる声をもらす。

「もう、あれだな。あの子は一人でもこの世界で生きていけそうだな。超能力なしで、魔物一体を撃破できちまうなんて、人間の限界

越えすぎだろ。素手とか、もうどうコメントすればいいのかわかんねえよ。つか、月島の超能力って何だったっけ？」

「スプーン曲げよ」

「役に立たねえ！」

夢村が答えると、宇佐川は律儀にツツコミを入れた。

∞ ∞ ∞

その時。

残り一体の魔物が、黒乃と白瀬に狙いを定めて肉薄していた。

「な、なんかこっちきたあああああああああああああああ
！！」

「大丈夫、純ちゃんは私が守るよ！」

魔物は疾駆の運動エネルギーを利用して、前足を強く振り上げた。成人男性の体にも等しい大きさの、筋肉質な右前足が空間ごと引き裂くような勢いで降り下ろされる。

完全にビビって動けずにいる黒乃。

頭上から降り注ぐ猛威を防ぐため、白瀬は横合いから恋人を突き飛ばし、自らも地べたと倒れ伏す。

致命傷は回避できたものの、魔物の爪が白瀬の肩口を切って出血させた。

「痛ッ」

愛すべき白瀬の苦悶の声が耳だに触れた途端、硬い土の上にしたかに打ちつけた背中への衝撃も、黒乃の中では意識外に吹き飛んだ。

「黒羽、ちゃん……？」

彼が涙目を丸くして、自身の体の上に覆い被さる白瀬の名を呼ぶと、

「だ、大丈夫大丈夫……。ちょっと引つかかれただけだよ」

ぺろりと舌を出して、ウィンクする白瀬。

無理して笑みを作ろうとしているが、額には汗がにじみ、肩の傷口からは赤い血が流れていた。

そして——恋人の傷ついた姿を視認した黒乃純白の顔から、あらゆる表情が消えた。

涙のあとだけを両頬に残して、彼はゆらりと立ち上がる。

何か威圧的な挙動をとったわけではない。

なのに、黒乃を取り巻く空気の感触がゾッと変化した。

「や、やべえぞ、皆……！」

その光景を見た誰かが、恐る恐ると呟いた。

「逃げろ！ 純白がキレたぞ……！」

第一章「悪女と中二病

∞ ∞ ∞

同時刻。

オカルト研究部が四足獣の魔物五体と遭遇、および交戦している頃。

神無月たちがいる位置から北に数キロばかり離れた森の中、一二歳と思しき幼い黒髪の少女が夕闇に染められ、独りで泣いていた。親か誰かとはぐれたのか、周りには誰もいない。

彼女はうつむき、こぼれる涙を手の甲で拭いながら鼻をすすっている。

「お嬢ちゃん、どうしたの？ 迷子？」

そこへ、狩猟用の木製道具を持つ村人らしき男たち三人が通りかかって、心配するように彼女のもとへ歩み寄った。

「お父さんと、はぐれちゃったのかい？」

男は少女の目線に合わせるため腰を落とし、優しくたずねる。すると、服の袖で涙を落とす少女は、細い肩を小刻みに震わせ、軽くしゃくりあげながらも、コクンと小さく頷いた。

「よし、わかった。それなら俺たちが一緒にお父さんを捜してあげよう」

「お嬢ちゃんのお名前は？ 言える？」

「ぐすっ……リン、ですっ……」

鈴の鳴るような声は、涙で濡れていた。
舌足らずの喋り方は、外見相応の幼さを感じさせる。

「そっか、リンちゃんね。じゃあ、さっそくお父さんを捜しに行こう。完全に夜になっちゃう前に見つかればいいけど」

少女はそこでようやく頭をあげて、男たちに顔を見せた。

まるで人形のように完璧な黄金比を持つ、絶世の美少女だった。
前髪は眉と目の間で綺麗なカットで整えられ、他の部分は小さな顔を包み程度まで伸ばされている。

くつきりとした二重の下に、長いまつげが添えられた大きな瞳は、ネコを思わせた。

血色がよく健康的な白い肌は、まだ誰も触れたことがないかのよう
に美しく、みずみずしい。

薄い桃色の唇は、甘く溶けてしまいたくなる誘惑を生み出している。

目にただけで全身に鳥肌が立つような、そんな幼くも美しい少女が上目遣いで言った。

「ありがとう、おじちゃん」

「なに、お互いさまさ。気にすんな」

「そうだぜ、嬢ちゃん。困った時こそ助け合わなくちゃな」

「こいつらの言う通りだぜ。はいとこ、お父さんを見つけよう。
なに、心配すんな。大声で叫べば、きっとすぐに見つかるさ」

爽やかにサムズアップする三人の男たち。

この人たちについて行けば、なんとかなる。

そう無条件で信頼できるほど、彼らの存在は夜に近い樹海の中では頼もしかった。

それなのに、少女の表情ははまだ晴れない。

彼女はポツリと、言葉を落とした。

「ありがとう、おじちゃんたち。……でもね？ 二つだけ」

「？ 二つだけ、何だい？」

再びうつむいて前髪の影響を目元に落とす少女を、男たちは初めて怪訝に見下ろす。

「二つだけ、おじちゃんたちに教えてあげなくちゃ」

「うん、何を？ 言ってごらん？」

少女は素直に首肯して、

「二つだけ——」

そして。

彼女が小さな顔をあげた時。

そこには、小悪魔を彷彿とさせる意地の悪い微笑が浮かんでいた。

「二つだけ、同情に値する君たちに、アタシからの忠告をプレゼントしようと思うわけだけねど？」

彼女の人柄を知らない者からすれば、豹変と言っても過言ではない変化だったかもしれない。

ただし、実際にはかぶっていたネコの皮を脱ぎ捨て、本性をさらしただけに過ぎない。

先程までの保護欲など微塵もわかない、悪意に満ちた様相こそ、本来の彼女を語るに相応しいのだ。

およそ汚れも知らない純情可憐な少女という印象が、たった一度の醜惡な笑みで崩壊した瞬間。

形の良い唇の端が、人を見下すためだけにつりあがり、陰惨な笑顔を作り出すためだけに八重歯をあらわにする。

いきなりのことに驚きの面様を示す男たちの真正面で、少女は彼らの反応を観察の双眸で嬉しそうに眺め、

「まず一つ目。この樹海は、人間たちの間では、けっこう有名な魔物の巣窟らしいよ。だから、この周辺には人里がないんだね。ゆえに狩猟に出るにしても、人間たちはこの森を狩り場にしない。……まあアタシたちはワケあって、仕方なくここを通るしかなかったのだけれど、そこは例外だよ」

先刻までの舌足らずな話し方もどこ吹く風、少女は饒舌に音を吐く。

にやにやと笑いながら、弱者をなじるように。

「で、半年ほど前だったか、マナに聞いたことがある。中には人間の子供が大好きな魔物がいると」

「……」

「なんでも彼らは擬態能力に長けているらしく、森に迷い込んだ人間と同じ人種に化けることで獲物を安心させ、そのまま自分たちの

巢までお持ち帰りするらしいよ。心当たりはないかい？」

少女はわざとらしい質問を口にした。

ガラス玉のように透き通った瞳を内包する目のフチと、唇が三日月型になっている。

「おや、そう言えば君たちは、ここで何をしていたんだい？ そんなみすばらしい『即席の狩猟用道具』なんか持って、さ。この樹海が魔物の巣窟だと知らなかったのかい？ だから、そんな貧相な武装で、こんな日が沈む時間帯に、たったの三人で、狩猟なんかを？ だから、迷子のアタシを助けられるくらいの余裕があったのかい？ はは、だめだね。無知は身を滅ぼすよ」

少女は、反論を言語化できない男たちを追い詰める。

話の落しどころへ、誘導するように。

「なんだか、アタシ、おじさんたちのこと不審に思えてきちゃった」

けれど、今度は愛嬌のある笑顔、だった。

それまでの人を食ったかのような態度が嘘みたいに、見た目に準じた愛らしさ。

軽く首を傾げて見上げてくる百面相の少女に、男たちはたじろぎながらも、なんとか否定の言葉を発した。

「お、俺たちが魔物？ 何を言い出すんだい。そんなわけないよ、お嬢ちゃん」

「そつだぜ、嬢ちゃん。俺たちはほら、どこからどう見ても君と同じ人間だろう？」

男たちが口々に唱えると、少女の様相がまた変動した。それはもう心底つまらなそうに、気だるげな声音で、

「そうだね。君たちの姿は、どこからどう見ても人間にしか思えない。どうしようもなく——ジャパニーズだよ。こんな異世界の樹海で日本人に出会えるなんて、まさに驚愕さ。でも、君たちは驚かないんだね？」

「二、ニホン人？ 嬢ちゃんは、一体何を言っ——」

「いや、もういい。もう飽きたよ」

吐息をついて、少女は男の言葉を遮った。

いつの間にか冷たい色に染まっている彼女の瞳からは、男たちに対する関心が失われている。

「その擬態能力は高度で素晴らしいけれど、今回は裏目に出てしまったね。まあ、そもそも君たちの登場自体が、不自然だったわけだけれど。……ああ、つまらない」

少女が手元で爪をいじりながら、どうしても良さそうに語った次の瞬間——

男たちの両足が地面から離れ、その体が虚空へと浮上した。けれど彼らの体を支え、持ち上げているものの正体は見当たらない。

まるで透明人間の大男が彼らを抱え上げているみたいに、視界に物質的な情報は映らなかった。

唐突な事態に、魔物の疑惑を向けられた彼らは、空中でジタバタと見苦しくもがく。

しかし不可視の力からは逃れられない。

抜群の安定感でもって、男たちの体は地上三メートルほどの高さで固定される。

そして現象は、まだ終わらない。

男たちの首筋に、人の手の形をした窪みが生まれた。

そう、誰かが彼らの首を締めあげているみたいに。

「……あつ、が……」

男たちは必死の形相で首元を掻きむしるが、不可視の握力に触れることすらできなかった。

「そういうわけで、もう一つの忠告、拝聴してくれるかい？ アタシとしては、こっちの方が重要なんだよ」

ふう、と肩の力を抜き、少女は特に表情を作らないまま、宙に捕らわれた男たちを俯瞰するように、

「アタシは自分の名前をあまり気に入っていない。リン？ ふざけないで欲しいよ」

言葉を唾みたいに吐き捨て、黒髪の少女——かくらみか・りん神楽坂凜の両目が刃物じみた鋭さを放った。

「アタシは神楽。これからは、ぜひそう呼んで欲しい。よろしく頼むよ」

∞ ∞ ∞

擬態を解除して観念した人型の魔物三体を、小悪魔系少女・神楽

坂が拘束している。

とは言え、いくら神楽坂がドSだとしても、拘束具を常時持ち歩いているわけではない。

三体の魔物を捕獲しているのは彼女の超能力——サイコキネシスだ。

不可視の念力による抗いがたい圧力が、魔物たちの心を完全に折っていた。

「ふむ、任務遂行ご苦労だった。相も変わらずの素晴らしい手際は、私も感心するばかりだ、凜くん。ふふ、さすがは我が組織きつてのエリート、と言ったところか。おかげでプロジェクト『神に至る^{ツクレコード}真実の調べ』のフェードー〇三αから一〇九βまで消化でき——ぐえっ」

「雨宮、アタシは誰だ？」

「あ、はい、神楽さんです。グッジョブでした。お疲れ様です」

茂みの中から無駄の多い動きで姿を現し、神楽坂のサイコキネシスで胸ぐらを掴まれたのは、オカルト研究部部长にして桜桜高校一の奇人変人——雨宮新道^{あまみや・しんどう}だった。

見た目は平凡で特筆するべき顔立ちもしていないため、描写を割愛させていただく一七歳の少年だ。

つまるところ、彼の異常性は外見ではなく、中身にある。

それは後々、分かってくることだ。

「もっと功績を褒めてくれても良いんじゃないのかな？ このアタシの美貌とハニートラップ作戦がなければ、アタシたちはずっと森の中をさ迷うハメになっていたかもしれないんだからね」

「い、いや今回の作戦はハニートラップなどではない。大体、神楽の幼児体型で寄ってくるのは、せいぜいロリコン紳士——」

「ハハハハハ、非常に興味深い発言をしてくれるじゃないか、ねえ雨宮？」

魔物たちにすら向けなかった神楽坂の殺気が、なぜか今仲間である雨宮に厳しく刺さっている。

薄い桃色の唇はゆるやかな弧を描いているのに、瞳の奥は据わっていた。

神楽坂は魔物三体を封殺しながら、器用にサイコネシスで雨宮の首もしめつける。

「もう一度、言ってもらおうか？　ん？　誰が一七の高校生にもなつて、身長が一四一センチで止まり、体重は四〇キロ、スリーサイズ上から順に六七・四八・六九の幼児体型だつて？」

「だ、誰もそんな具体的な情報は開示していなギブギブギブ——」

「おや、欲しがるね。仕方ない。お望み通り、与^{キブして}えてあげよう。君にひどい暴言を吐かれたのにもかかわらず、アタシは君の願いを叶えてあげるんだ。仏顔負けの慈悲に涙するといいよ」

「きゅっ……」

神楽坂の中に、仏の顔は一度すらなかった。

魔物たちは肩を寄せ合い震え、雨宮新道は登場早々、自身の中二病っぷりをアピールしただけで気絶する。

しかし、それでは神楽坂も荷物が増えるだけだ。

彼女自身は怪力でもなんでもない。

ゆえに、すでにこの空間の支配者とも呼べるサディスト少女の、本領が発揮される。

「雨宮、気絶している場合ではないよ。もう、ほとんど日が暮れかけている。これ以上、この樹海にとどまるのはナンセンスだ。神無月たちとも、はぐれたままなのはマズい。どうにかして、彼らと合流しなくては、アタシたち二人だけでは、いずれ無力になってしまう。だから、さっさと起きたまえ、雨宮。こうしている間にも、アタシの充電は枯渇しているんだよ？　こんな天気では君など、ただの中二病をこじらせたイタイ少年に過ぎない。まったくの役立たずだよ。だから、ほらほら、目を覚ましたまえ」

神楽坂の唇より次から次へとセリフが紡がれている間、雨宮新道はサイコネシスによる往復ビンタをずっと食らっていた。

神楽坂の表情は、ちよつと楽しそうな模様だった。

そうして視覚に映らない往復ビンタが、やがて三ケタに達しようかとした寸前、頬を真つ赤に腫らした雨宮が覚醒する。

「うつ……俺という身に一体、何が？　はっ、まさか、また私の中の別人格が？　くっ、こんな時までアイツは俺の体の主導権を……敵は外側だけじゃないということか。……ふふ、だが後一步のところで届かなかったようだな、シュレディン＝シュバルツ。貴様はいタタタタタタ神楽さん耳たぶ引つ張らないで」

「雨宮、妄想を垂れ流している場合じゃないよ。そろそろ本気で移動しないと、アタシの充電も底を尽きてしまう。なにせ、最低ラインの六時間しか眠れてないんだからね」

「う、うむ。ならば、早急に次のミッションに移行するでしょう。おい、魔物ども。私たちを人がいる街まで誘導しろ。……嫌だと言

「つたら？　だと？　面白い。なら……試してみるか？」

ふっ、と雨宮はニヒルに笑みを作るが、魔物たちは一度も発言していない。

「ククク、なら思い知らせてやろう。我が呪われた真名を耳にしてぶべっ」

一向に話が進まないの、神楽坂は無感動に雨宮を黙らせる。
その方法は、やっぱりサイコネシスによるものだ。
調子をこいていた雨宮をそのまま放置して、

「取引だよ、魔物。アタシたちを人里まで案内すること。そうすれば、君たちを殺さずに解放してあげよう。アタシもべつに魔物狩りしたいわけじゃないんだ」

悪女めいた笑みを表出する神楽坂。

ここで彼らが拒否すれば、彼女は問答無用でサイコネシスの圧力を強めるつもりだった。

けれど、魔物三体は保身に走った。

コクコクと何度も頷く。

「素直でよろしい。では、さっそく案内してもらおうか」

少女は満足そうに頷き、不敵な破顔を表したのだった。

第一章「樹海の中で」

∞ ∞ ∞

雨宮新道、神楽坂凜を除くオカルト研究部メンバーの視界は、分厚い煙に包まれていた。

辺りには、土と肉が焼ける焦げ臭い異臭がわだかまっている。間近で爆音を耳にしまったため、聴覚の回復には多少の時間を要した。

「ゲホツ……ゲホツ……、痛ッ。クソ、神楽ちゃ——はいないんだ。おい、皆、無事かよ？」

人生設計に『神楽の名前を呼べる世界で唯一の男』になることを夢見ているおめでたい少年・宇佐川慎二が咳き込みながら仲間たちの安否を確かめた。

彼がうつ伏せに倒れた状態のまま意識の混濁を振り払うかのように、かぶりを左右へ振っていると、

「ええ。こちらは、なんとか五体満足です」

パイロキネシスの超能力者にしてオカルト研究部副部長・神無月玲がゆっくりと立ち上がり、着物に付着した汚れを手で払い落しながら応答する。

神無月直属の執事・霧墨絵利亜によるとつさの判断で、二人はほとんどダイビングするように地面の上に伏せて、『流れ弾の爆風』をかわしたのだ。

「にしい、恋は盲目だねエ」

人間離れた戦闘能力を持つ月島桜は、自分で倒した例の魔物を防壁にして難を逃れたようだ。

半眼の下にアイシャドーにも似たクマを作る猫背の彼女に、盾にされた四足獣の魔物は少しだけグロテスクな形状になっている。

「純白の場合は周囲に対して、だけどね」

そして月島と一緒にになって魔物の影に飛び込んだ夢村しをりが皮肉を継いだ。

目が痛くなるくらいの明るいトーンで染めた金髪や、オシャレと言ふよりは他者を威嚇するためにだらしなく着崩している桜桜高校の女子制服、乱暴な口調は、反抗期真っ最中といったイメージを目にする者に植えつける不良みたいな身なりの少女ではあるが、そこで彼女の本质を見抜ける人間は少ないだろう。

「……キテル？」

「——ウン、キテル」

夢村しをりという少女は、たとえ自身に危険が迫っていても、誰かを見捨てたりしない。

片山右京、片山左京。

『流れ弾の爆風』が押し寄せていたのに、普段通りぼーっと突っ立っている双方の腕を引っ張って、月島のもとまで避難させたのは夢村だ。

この双子の先輩方には、もう少し自分たちで危機管理を徹底して欲しいものだった。

「わ、私たちも大丈夫、です」

しどろもどろな物言いを聞いただけで、オカルト研究部全員が発言者を特定できる。

神咲みくるしかない。

彼女は霧墨が仕留めた方の魔物をシエルターにしたようだ。

他にも社交性ゼロの少年・稲葉泉と彼の幼馴染みである美少女・岸光、オカルト研究部随一のミステリアス・黒子さんがそこには隠れていた。

界限にたちこめていた硝煙のベールが、時間の経過と共に薄らいでいく。

粉塵の濃度が最も高い爆心地に、やがて二つのシルエットが浮き彫りになった。

白瀬黒羽の背中と膝裏に、それぞれ右腕と左腕を回して抱き寄せる黒乃純白の姿だ。

吹けば飛んでしまいそうな細い身体の一部どこに、人をお姫さまだつこできる筋肉がついているのか、いつもの草食系具合からは比べ物にならないほど、今の黒乃は凜然たる風貌で屹立していた。

まるで花嫁を守る新郎のよう。

捕らわれの姫を救出した勇者のよう。

そして、愛を誓い合った二人の幸せを阻害する脅威・四足獣の魔物はすでに新郎勇者の手によって撃退されていた。

黒乃純白。

彼の超能力は摂取したカロリーの量に比例して爆破の規模、精度、速度が上昇するエクスプロージョンである。

「純白のせいでちょっと死にかけたのに、微妙に格好よく見えてる私が一番腹立たしい」

夢村がジト目で言った。

「にしい、ギャップ萌えってやつだねエ。分かるよオ、夢ちゃん。でも、だめだからねエ。純ちゃんと黒ちゃん、相思相愛なんだからさア」

「……キテル？」

「——ウン、キテル」

月島と片山の電波姉妹がなんか言っているが、夢村は取るに足らない情報として右から左に流す。

「なあ、霧墨氏よ。純のことは斬らねえのか？」

「ん、なんだ宇佐川なんとか。そんなに早く僕に斬られたいのか？」

「なんでそうなる！？」

「そんなことも理解できないのか。だから貴様は常々、僕に『頭の悪いゴリラ』だと思われているんだ」

「そんなことを常々、思ってたの！？」

「まったく……貴様は親に教えてもらわなかったのか？ 順番は並んで待ちましよう、だ。一般常識だろうが。横入りはよくない」

「いやいやいや俺、並んでないから！ 霧墨氏に斬られるための列なんか並んだつもりないから！」

霧墨の中にある、純白と宇佐川に対する扱いの違いは何なのだろう

う。

「フン。まあ、あの情けない泣き虫男は、魔物を一体倒したことでプラマイゼロだ。それに比べて貴様という奴は、雨宮中二病並みの役立たずだな」

「ぐっ、雨宮よりは使いやすいぞ、俺」

宇佐川が悔しそうに歯噛みする横で、霧墨はすました顔で小馬鹿にするように肩をすくめた。

「あ、あの、ケガは？」

一方では、神咲が魔物の影から飛び出して、黒乃にヒロイン級の抱え方をされている白瀬に問うた。

「大丈夫！ 実はたいしたことないよ。絆創膏でも張っておけばモーマンタイさ！」

もしかして、彼女は黒乃を奮い立たせるための演技をしたのではないだろうか。

そんな思考が全員の中を回流した。

「「よ、良かった……」」

ただし、黒乃と神咲は気づいていないようだ。

二人は異口同音に安堵する。

同時に、黒乃の全身から力が抜けて白瀬を地面に下ろした。

いつも通りの黒乃が帰還する。

エクスプロージョンを行使したことで、また少し痩せてしまった

のではないだろうか、頬がかすかにやつれてしまったかもしれない。

「あわわわわわ怖かったああああああ怖かったよおおおお
おおおお黒羽ちゃん」

「よしよし頑張ったね、えらいぞう」

ぶるぶると小動物のように震える黒乃の頭を、白瀬が優しく撫でている。

「おれ、もう無理もうダメもうできないよおおおおおおおお
お」

感情を言葉に昇華することで恐怖心の払拭を行っているのか、黒乃が白瀬にすがりついて泣いていると、その光景を遠目から眺めていた稲葉が、なぜか陰しい表情をしてカップルに近づいた。

「な、何？ 稲葉くん。あつ……そつか。あの、ごめん。また見境
ないことやっちゃって。ほんとにごめん。皆もごめんなさい。ケガ、
なかったですか？」

だばだばと涙をこぼしながら、黒乃は頭を下げる。

それから怯えた目で皆の様子を窺うと、全員を代表するかのよう
に稲葉が（どうしてか、ばつが悪そうに）一歩前へ踏み出して言う。

「いや、俺たちのことは気にするな。それよりも、その、なんだ……
：残念だったな、純白。お前はたった今、コンシエルジュが客に対
して言うてはいけないNOの言葉を、ものの二秒で口にしてしまっ
た。『もう無理もうダメもうできない』の部分だ。だから、そちら
の道は諦めた方がいいと思う」

「「「「「.....」」」」」

「えっと、泉くん。そのアドバイス、今必要だったのかな？ ほ、ほら、なんかすごく乾いた空気になっちゃってるから」

岸が冷や汗をかいて、なんとかフォローしようと努力している姿がいじらしい。

「あはは大丈夫だよ、いなばー！ 純ちゃんはコンシェルジュになる予定はないんだから！ 将来は私のお嫁さんだもんね」

「そうか」

「泉くん。そこは、そうか、で済ませちゃダメだと思うの。お嫁さんは職業じゃないし、そもそも純白はお嫁にはなれないし。あ、でも性転換すれば」

「そこを掘り下げるのか、光」

幼馴染み二人の会話を聞いていた宇佐川が、ついに稲葉を指差して吹き出した。

「たまに口を開いたと思ったらこれかよ。お前、実は俺より空気読めない男だろ」

「あんたは空気読んだ上で、空気読まないタイプよね」

夢村が呆れ成分の強い眼差しを宇佐川へと送る。

「さて、皆さん。お喋りはそろそろ切り上げて、移動した方がいいですよ。私たちの戦闘音に触発された魔物たちが寄ってきてしまうかもしれません。今回はなんとか対処できましたけど、次もこう上手く撃退できるとは限りませんから。無駄な戦闘は回避できるのなら、回避するにこしたことはありません」

神無月が透明な声で、もつともな提案を述べると、

「あ、あの、すみませんっ」

すかさず神咲が小さく挙手して、珍しく一同の視線を集めた。

一斉に注目を浴びたことに神咲は体を萎縮させながらも、唇を細かく動かす。

「あ、あう……。え、えっと、雨宮くんたちは、どうする、んですか？」

「おお、そうだぜ。みくるちゃんの言う通りだ。神楽ちゃんを一人にしてはおけねえよ。こうしている今も、俺というナイトの助けを待ってるかもしれねえんだ」

拳をグーにして勝手に盛り上がっている様子の宇佐川に、霧墨はウザったそうな視線を突き刺した。

「だからと言って大声で叫び、僕たちの居場所を示しても危険だ。彼らには悪いが、自力で樹海を抜けてもらう他ない」

「まあ、た、霧墨氏はそうやって協調性のないことを言う。一年間とも苦労してきた仲だつてのに、血の涙もないやつだよ。輪を乱す捻くれ者キヤラか。そういうのが格好いいと思ってらっしゃる時期

なのか」

「うるさい黙れ斬るぞウザ川なんとか」

「『ウ』と『川』と『ん』も合致してるじゃねえか！ たぶん、それ本名の方が言いやすいぞ！？」

「まあまあ二人とも落ち着いてください。喧嘩していると、さっきの二の舞になりますよ」

神無月が微苦笑をもらしながら、やんわりと仲裁に入ったことで、宇佐川と霧墨はいがみ合うように睨み続けるも、口論を一度休止する。

「それに神楽ちゃんなら大丈夫だと思いますよ、宇佐川くん。なにせ計略の小悪魔ですから。あの子なら魔物も狡猾にだまして、下僕にするくらいお手の物でしょう」

「ええ、やりかねないわ」

「にししィ、やりかねないねエ」

「ああ、やりかねないな」

「やりかねない、です」

順に夢村、月島、稲葉、神咲が同調する。

「君たち本当に神楽ちゃんを人間だと思ってる！？」

彼らは魔物との遭遇から何も学んでいないようで、部室にいたいにはギヤーギヤーと騒がしく討論を交わす。

「せめて右京先輩か左京先輩が雨宮たちに同伴していれば、連絡の取りようもあったのに」

夢村が爪を噛みながら、苛立たしそうに独り言ちた。

「にししィ、この世界じゃケータイも無力だしねエ。魔法も使えない私たちには、こういうケースは苦だねエ」

「……キテル？」

「——ウン、キテル」

この電波的な双子はこうして定期的に、『テレパシーによる相互の通信回線』が途絶えていないか、音声チェックをしている。

ただし、彼女たちテレパスは、二人の間でしか呼応できない仕様だ。

他人とのコミュニケーションは普通の人同様、発声しなければならぬのである。

「彼らとはぐれてしまっただけから、そこまで時間は経過していません。遠くには離れてないと思いますけど……」

言いながら、神無月は空を仰いだ。

夜の淡い蒼黒と、沈む夕日が放射するオレンジ、長く大きな白い雲がバランスよく溶け合って、そこに調和的なグラデーションを生み出している。

絵師が筆を取ったら、とても素晴らしい絵がキャンバスに載りそ

うな光景が広がっていた。

それでも、森の中はすっかり宵の口に入っている。

急に心細い雰囲気が森林の隙間をぬって、オカルト研究部メンバーの背筋に忍び寄った。

すると、誰もが無言で移動を開始した。

とにかく、一秒でもはやく人工の灯があるところに行きたかったのだ。

彼らは再び、足場の悪い樹海を突き進む。

「というか、誰も雨宮さん単身の心配はしてあげないんだ……」

ふと、列の最後尾周辺を徒歩する黒乃がボソッと呟いた。

「あはは。大丈夫だよ、純ちゃん。あまみーなら今頃、いつものお気に入りポーズをキメながら渋い声で、『総員第一種戦闘配置。ミッションコードー〇四Y——サルベージを発令。……これより、世界を敵にする』とか言ってるよ」

右の手のひらで顔面を覆い隠しつつ、開いた人差し指と中指の隙間から右眼を覗かせる白瀬。

直立する体はなぜか、黒乃に対して右半身を向けていた。

「そ、そだね」

∞ ∞ ∞

「総員第一種戦闘配置！ ミッションコードー〇四Y——サルベージを発令！ これより……世界を敵に回す！」

「……君、本当にそのポーズとセリフが好きだよな。寝言と、それ

から何の伏線もなく唐突に言い出すくらいには気に入ってるね？」

「ふ、それはどうかなエージェント神楽坂。君は私の脳内を観測できるのか？ いいや、できないだろう。人の心理を証明することなど誰にもできない。エージェント夢村の読唇術だって、表層部分しか読み取れない。ゆえに、まさに俺の頭の中はシュレディンガーの猫箱さ」

「君みたいな人種は、その手の単語や用語も好むよね。証明だの観測だの、すぐに言いたがる気がするよ」

「そこで辟易するのは人として未熟な証拠だぞ、エージェンツ。人間とは思考の生き物なのだ。この頭脳は飾りではない。創造神に反逆し、自らの手で獲得した人類初の武器だ。それを自ら唾棄してどうする。これから君は、どう生きていくつもりなのだ」

「どうでも良いから、もう少し速く歩いてくれないかな。それとももう一度、空を飛んでみるかい？」

「……遠慮しておこう。まだ私の出る幕ではない。それに、さっき確認したばかりではないか。まだどこにも人工物は見当たらなかった。見渡す限り、森森森のオンパレードだよ」

「それがわかつているのなら速く歩きたまえ、とアタシは言ってるんだよ、雨宮」

「はい」

第二章「魔物の王と、人間の王」

どれだけの時が進んだのだろう。

石造りの無骨な地下牢に、温度という概念は取り除かれているように思えた。

温かくも寒くもない、ひたすらに無機質な空間。

そこに長時間も囚われていると、徐々に五感が麻痺してくる。

申し訳程度に壁でゆらめいている、ろうそくの灯でさえ心のよりどころにはならなかった。

むしろ、無駄に広く作られている虚無の牢獄では、ろうそくの炎はあまりにも無力すぎて、陰影の強弱を演出する損な役目でしかなかった。

収斂の闇色が、白い少女の精神をじりじりと摩耗させる。

一度捕らえた者を決して逃がさない牢獄の中央に、まるで象徴みたいに突き刺さる十字架を模したオブジェ。

その拘束具に細い四肢を縫いつけられている、世界で最後の魔王マナ・ファントム。

人間の外見的年齢を参考にするならば一五歳ほどの少女が、力なくうな垂れていた。

「……」

かつて、さらさらと水のように流れていた真っ白な髪は、薄汚れ、乱れていた。

秘宝さえ敵わない輝きをたたえていた金色の双眸も、瞼で閉ざされている。

魔王を魔物の王たらしめていた大量かつ重厚な魔力は、もはや駆け出しの魔法使いにも劣るだろう。

数時間前、たった一人で数キロ単位の結界を構築し、四方八方より穿たれる魔法攻撃から古城を死守していた魔王とは思えないくらい、その姿からは以前の生命力が感じられなかった。

「……」

か細く、浅い呼吸だけが続く。

決して死んでいるわけではない。

それでも彼女の格好を直視して『生きている』とは、とても表現できる状態ではなかった。

なぜなら、あと数刻も及んだらマナ＝ファントムは……。

「……」

自由も、時間も、誇りも、魔力も、仲間も、領土も奪われ、マナの小さな手に残されているのは着衣している特注の『桜桜高校女子制服』と、右手の指にはまる『魔王の指輪』だけだった。

けれど、その服も至る箇所が破れてマナの赤い血が滲み、ぼろぼろの泥だらけだ。

この衣装は、異世界からやってきたという愉快な少年少女たち、オカルト研究部の女子メンバーが着ていた服をもとに制作したものである。

その可愛らしい形状に魅せられたマナが、自分で一から拵えた。魔法を使わずに、この世界に存在する似た素材を用意して加工したのだ。

マナは衣類など魔法を使ってさえ作ったことがなかった。

だから裁縫が得意な神無月玲や、手先が器用な夢村しをりに教えてもらいながら一緒に制作した。

先日、完成したばかりだった。

何度、失敗作が出ただろう。

この完成品に辿り着くまでに半年もかかってしまった。
それだけに、出来上がった時はとても嬉しくて、この日までずっと普段着にしていた。

「……」

マナには眠りつくことさえ許されていない。
睡眠障害の魔法術式が、十字架のオブジェに細工されているからだ。

彼女の脳波を常に観測しており、眠りについたら判定した瞬間、電流を流す仕組みになっているらしい。

今のマナは人の身に等しい希薄な存在だ。
衰弱した体に、その刺激は致命傷になるだろう。

「……」

その時、マナは閉じた瞼の奥で複数の足音を感知した。
上層階から、この地下牢に続く階段をブーツで踏み締めている硬い音。

おそらく、それはここにくる。
そして予想に違わず、魔王を封じる空間の扉を開き、その中へ身を投じる人間たちの輪郭が生まれた。

ほぼ同時、マナの左胸に一筋の閃光が貫通する。
それは赤い光束の大剣だった。

光の束に、柄や鍔といった装飾はない。
その代わり、幾何学的な紋様を描いて明滅する、螺旋の帯を刀身全体にまとっている。

察するに、魔法的に意味のある拘束性の強化術式だろう。
十字架とマナの体に対して垂直に突き刺さった光束の剣は、拘束の剣でもあるというわけだ。

「調子はどうだ、世界で最後の魔王」

牢獄に一つしかない出入り口に、一〇人ほどの人影が佇んだ。

そのほとんどは護衛の魔法使いたちだろう。

マナと二〇メートル以上も離れた入り口付近で構えている。

そして、多数のうごめくシルエットの中心に――人間の王はいた。マナの髪色とは異なる、人の成熟による白髪だ。

けれど、その王を目にして老いていると感想を抱く者などいないだろう。

彼はいまだ衰えを知らず、全身からエネルギーをみなぎらせている偉丈夫だった。

野心と強欲に満ちた十指には、九つの指輪がはめられている。

人間の指輪ではない。

魔王の座。

継承の証。

世界で二つとない一〇種類の秘宝。

「そちの死も近いぞ、魔物の王。夜明けの宴は、着々と準備が進められている。無論、主役はそちだ。今のうちに可能な限り生を実感しておくといい。この粗末な空間で、できるものならばな」

人間の王は獰猛な笑みを浮かべて、十字架に繋がれている魔物の王に勝者の視線を注いだ。

両者の相対は、けれど対敵などと呼べるような状況ではなかった。人間の王が、ただ弱り切っている魔物の王を蹂躪しているだけ。マナの方に反応はなかった。

人間の王は、それが愉快で仕方がなかった。

やがて偉丈夫の力強い目線が、マナの全身から、ある一点の部位に集束する。

彼女が右手の薬指に装飾している、魔王の指輪である。

「ワシがそちの首を切り落とし、その指より秘宝の輪が解かれた時、世の流れが大きく変わる。そう、人間の時代が始まるのだ。その筆頭に立つのが、我が国である。この城を拠点に、世界から忌々しい魔物どもを一掃してくれるわ」

そう豪語する人間の王が、魔王の指輪から視線をはずした。威風堂々とした体格と性格に見合った豪快な嘲笑を発している。

「……っ」

と、そこで初めて、魔物の王マナ「ファントム」が、ひび割れた唇を微細に動かした。

人間の王は、それを見逃さなかった。

彼はそれまでの絶笑とは種類が異なるように相好を崩した。にやにやと、悪質な笑面を作り上げたのだ。

「んん？ 何だ、魔物の王よ。聞こえぬ。すまぬがもう少し声量を上げてはもらえぬか。ワシも人の身よ。老いには敵わぬ。この頃、耳が遠くてな」

マナはかすかに身じろぎ、余力を振り絞って乾いた言葉を紡ぐ。

「……そ………なたたちの、陣営に寝返った………余の、元配下たちも………一掃の対象、か………？」

「ふむ、そうだな。そちを裏切った同胞どもは褒美として、世界中の魔物を狩り尽くした最後に処分してやろう。特別待遇だ」

マナの瞼が見開かれた。

数ミリ単位で顎をあげて、彼女は金色の眼で人間の王を射抜く。

「それで睨んでいるつもりか、魔物の王。威厳も何もあつたものではないな」

けれど、富も名声も手に入れた人間の王に効果などなかった。

白髪之王は冷笑で魔物を睥睨する。

「この世には指輪の数だけ――すなわち、十体の魔王が存在した。それぞれが支配する土地で、自分の国を作り上げていたな。当然、そこに政治が介在する以上、人間側との小競り合いも生じるだろう。だから、こうして戦争が起き、人間側が勝利した。それだけのことだよ」

「……どう、して」

「ん？ どうして、ワシらが魔王狩りなど始めたか、か？」

人間の王はあらゆる力を獲得した指に一つずつはめる、九つの秘宝の輪を視界に入れた。

魔王の座を意味する指輪は、古来からの単なる継承の伝統でしかなかった。

その指輪自体に何かしらの力が秘められているわけではない。だからこそ人間の王が、こうして禁忌を破って魔王継承の指輪をつけている。

そして、その指輪の本来の持ち主たちは、すでにこの世にいないのだろう。

「そちに説明する義理はない」

威厳に満ちた王の低い声音に触発されたわけでもなかったのだから、マナは意識のしつかりした声色をわずかばかり取り戻す。

「人間の王、そなたたちに共存の道はないのか……」

「命乞いか？」

問われると、魔物の王は弱々しく首を振った。
左右に、だ。

「余はどうなっても構わない。けれど、中立の立場にいる魔物たちや、そなたたちに忠誠を誓う魔物たちは――」

「ない」

断固として自身の意見を変えない言霊が、マナの願いを叩き切るように遮断した。

「そちの同胞は全て滅ぶ宿命だ。諦める」

これ以上マナと会話する気はないのか、人間の王は踵を返し、取り巻きの従者たちへ淡々と指示を与え始めた。

白髪の偉丈夫は最後に一度だけ肩越しにマナの全貌を流し見てから、興味をなくした足取りで立ち去った。

彼の背後を警備するように追隨する配下の魔法使いたち。

そのうちの何名かが、この場に留まった。

よく観察すると、残ったのは人間だけではなかった。

たくましく天を仰ぐ一角と、ハイトーンの立派な毛並みが美しい

獣人型が一体。

人間の成人男性より一・五はでかい図体には見覚えがある。

——数日前までマナ・ファントムの古城に仕えていた魔物だった。獣人型の魔物は苦汁でもなめて続けているみたいに顔を歪めて、マナから遠く離れた位置に移動した。

ただっ広い地下牢の四隅に、人間の王が使役する魔法使いたちが並ぶ。

そして、詠唱による結界のセキュリティシステム構築を開始した。内外問わず魔法的、および物理的干渉を無条件無効化する世界水準特一級の結界術式が組み上げられる。

マナが死ぬその瞬間まで、一切の救済を拒絶する絶対不可侵の壁だ。

（なるほど……）

魔物の王は得心して、再びゆっくりと両目を塞いだ。

（人間の王、そなたはそこまで徹底するつもりか）

マナの結界構築を担っている人間の魔法使いは三人。

彼らは最初から国王軍側の者たちだろう。

宿敵であるマナに対する容赦はないはずだ。

けれど、獣人型の魔物は違う。

彼は、ついこの前までマナの下で働いていた魔物だ。

ではなぜ人間の王は、世界で最後の魔王を世界同時中継で公開処刑する、この大事な時に、重要な結界を展開させる依り代的一端を、彼らがもつとも嫌う魔物に任せたのか。

決まっている。

デモンストレーションじみた真似だ。

本当に魔物が人間側に屈したことを誇示するためだ。

魔物の王を公衆の目前で処刑し、その下についていたはずの魔物が、かつての王の処刑に協力する。

そんな映像が全世界に向けて一斉配信されるのだ。

その後、どのような効果が得られるか人間の王はすでにシュミレーションしている。

（抗えば、どうなるか……火を見るより明らかだ）

まだ結界の構築段階であるここで、魔物の彼がシステム内に何らかの仕掛けを施し、ウィルスなどを忍ばせておくのも不可能だろう。人間たちに抜かりはない。

結界を制作している者たちは、一瞬見ただけで優秀性を実感できる選りすぐりのメンバーだった。

結界魔法に特化している人材を選択している。

そもそも、展開しようとしている結界のスペックが違い過ぎるのだ。

何かしらの異常、違和感が発生すれば、すぐさま発信源を特定されるだろう。

だから、魔物の彼もただ黙って結界構築に魔力を費やすことしかできない。

一切の抵抗は許されていない。

（しかし、それでいい。そなたたちは生き延びろ。生きてさえいれば、いつか機会は訪れる。その時を静かに待って、いつかまた自分のために、そして偽りではなく本当に心を捧げた主のために、新しい道をゆけばいい）

自分のことは棚にあげて、マナは干からびた思考に埋没していく。考えていたのは、雨宮たちを元の世界へ戻すために術式理論だった。

魔法によるアプローチで、どうにかして彼らを帰してあげたかったのだ。

おそらく、この世界は雨宮たちにとっても生きづらくなるだろう。だから、

（もしかすると、なんとかなるかもしれない……。けれど、彼らに伝える方法がない）

マナは暗闇の中、元配下の魔物の存在を静かに感じ取る。隙はあるだろうか、と窺いながら。

第二章「超能力者たちの居場所」

∞ ∞ ∞

頭上では三つの月が、それこそ三つ子のように仲良く並んでいた。重なり合う銀色の燐光は、夜空を幻想的に染めている。

けれど、その妖しげな月光も、緑色の葉で覆われた森の中には届かない。

ぼんやりとした暗闇になるべく溶け込むように、オカルト研究部メンバーは歩を進めていた。

彼らは二列縦隊で黙々と進軍する。

明かりを灯さないのは、魔物たちを光源で無用におびき寄せないためだ。

というのはプラス思考による半ば現実逃避で、実際には誰も明かりを灯すための媒体を所持していないからだっただ。

神無月玲という少女はパイロキネシスの使い手だ。

とは言え、超能力の行使はタダではない。

能力者自身の体力や精神にも負担がかかる。

もし今しがたのように不本意な魔物との戦闘に突入してしまった際、神無月がバテていたら戦力がかなり激減することになってしまう。

自分だけを守るなら集中力を欠いた状態でも戦えるかもしれないが、彼女たちには仲間がいるのだ。

そして、ここにいる者が全員、戦闘能力に秀でているわけではない。

宇佐川慎二や夢村しをり、白瀬黒羽、岸光、片山姉妹などは、能力的にもサポート役に回ることが多い。

よって、神無月には体力を温存してもらっておかなくてはならな

かった。

そんな理由があつて薄気味悪い宵闇の山奥を突破しようとしている彼らだが、そのかいあつてか、あれから魔物は出現していない。それどころか、樹海は世界から切り離されたかのように静まり返っている。

耳鳴りさえ聞こえてきそうな中で、彼らは限界まで音を殺して前進する。

先頭を歩いて皆を率いる神無月が時々立ち止まり、空を見上げていた。

その傍らに当然のように霧墨絵利亜が控えている。

二人は夜空に充滿する銀色の星々を観察し、この一年で覚えたこの世界の星座、つまり無数にある星の配置関係から方角を導き出して、随時、行く先の微細な調整を相談し合っているのだ。

記憶力抜群の神無月と彼女の従者・霧墨が、脳内にこの地方の地図を広げて全員を先導する。

「どうして雨宮さん、あんな残念な人になってしまったんだろう？」

黒乃がおもむろに、解答を求めてない感じで呟いた。

隣で足を動かす白瀬が首を傾げると、

「ああ、そっか。あんたたち、北中出身だから知んないのね」

黒乃の言葉を偶然、聞きとめた金髪の夢村が単調に答えた。

黒乃と白瀬、二人の前列で徒歩しているから気になったのだろう。夢村は暗い足元に目を配りながら、声を潜めて訊ねる。

「雨宮に妹がいるのは知ってた？」

「そうなんですか？」

「初耳だね、純ちゃん」

白瀬も食い気味で夢村の言葉に耳を傾ける。

「でも、もうこの世——じゃなくて、あっちの世界には、いないんだよね」

一瞬、黒乃は夢村が言った言葉の真意を計りかねた。

「それって、どういう……」

「原因は私たちと同じ超能力を持ってしまったことと、それを起因とする厄介な精神病、ってところかしらね。ストレス性のものだっらしいわ。自分の頭がおかしくなったと思い込んで、塞ぎ込んでしまったの。彼女の場合、当時はこうして私たちみたいに寄り添える仲間がいなかったから、色々とつらかったんだと思うわ」

まるで自分が体験したことがあるかのように、すらすらと語る夢村。

意図的に感情移入をしない喋り方をしている。

おそらく、それは自分の過去に重ねて思い出してしまうからだろう。

彼女の抑揚のない小声は続いた。

「雨宮の家庭、かなり複雑なのよ。両親が小学生の頃に離婚して、雨宮兄妹は父親の方に引き取られた。父親は離婚後すぐに再婚したんだけど、でも……ホントなんなのよね、父親はすぐに他界してしまったらしいわ。不幸な事故にあったね。それからご想像通り。出会って間もない、血の繋がらない母親との生活が始まったわけよ」

「雨宮さんたちは、その……元のお母さんのところへ行くつもりはなかったんですか？」

「無理よ。それに元の母親は母親で、新しい家庭を作って幸せを成就していたらしいから」

「で、でも、そんなの、だって……」

「親子じゃないか、って？」

不満げな表情で黒乃はうつむき、閉口した。

あの白瀬ですら、この時ばかりはしょんぼりと肩を落として恋人の手を握っていた。

淀みなく徒行する夢村はふいに浅く、しかし込められた感情はきつと重い、そんな溜息を吐いて、

「望んだ婚姻じゃなかったのよ、雨宮の最初の両親。だから、母親の方は子供のこともべつに愛してなんかいなかったのね、きつと。腹を痛めたことが、雨宮たちに対する愛情にはなかった。それは、ただの……」

そこから先は、さすがの夢村も口に出すことがためられた。

「まあ、そんなこんなで、雨宮兄妹は他人にも等しい母親との新生活を始めた。どんな母親だったのかまでは私も知らないけど、正直、想像を絶するわね。息苦しいのは間違いなかったと思う。そんな折りよ、雨宮の妹が自身の特異な力に気がついたのは」

「超能力、ですか？」

ええ、と夢村は簡単に首肯した。

「そりゃあ、もう悩んだらしいわ。精神的にデリケートな時期に、デリケートな状況、父親の再婚の際に住まいも変えて、学校も転校したばかりだった。知人なんていない状況で、そんなことになってしまったら、どうなると思う？」

「……おれたちも日頃から悩んでいますからね、この力に」

今はそうでもないですけど、と黒乃は意気消沈気味で言葉を付け加えた。

「そう、私たちは苦悩していた。人とは違うことに。この世界みたいに魔法が普通に浸透しているのなら、きっと問題なんて何もなかったのよ。でも、私たちの世界は違う。超能力なんて非現実的。それも他人に危害を加えないものなら、まだ良いのかもしれない。けれど……」

「おれなんかのは、避けられますよね。爆発……、しますから」

「私のもよ。読心術者なんて、側にいられて気持ちの良いものじゃないでしょ？」

夢村しをり。

彼女は他人の思考を読み取ることができる超能力者だった。

対象の人物に意識を集中すれば、その者が考えていることの表層を盗み聞くことができる。

その力に目覚めたのは、夢村が七歳くらいの頃だった。

最初は、不思議だなと思いつつもあまり気にすることはなかった。

だから、彼女は鈍感になってしまっていた。

人の心を覗けるという能力が、他人からいかに忌避されることが熟知できなかった。

大人に近づくにつれて、周りの人間たちは夢村から遠ざかっていった。

家族でさえ、だ。

皆、『なんか心の中を見透かされているようで気持ち悪い』という理由で離れていく。

原因には心当たりがあった。

誰かと会話をしていると、夢村は話している相手の心の声が聞こえやすい状態になる。

すると、目の前の人間が言っていることと、思っていることの違いに気づくことが多々あった。

こちらのことを思つての気遣いや嘘を見破つて、野暮な彼女はそれを指摘してしまっていたのだ。

それだけではない。

相手が会話の中で口にしてもいないことを、つい言い当てたりしたこともある。

「でもさ、そんなの悔しいじゃない。私だって、好きでこんな力を持つてるわけじゃないのよ。他人に心を覗かれる方も嫌かもしれない。でも、覗く方だって嫌なのよ。人間の本音なんて綺麗だったためしなんか、ほとんどないんだから」

「それでも、おれたちはこれと向き合つて生きるしかない」

黒乃の声には妥協、諦めといった想いが滲んでいた。

しかし、桜桜高校一のネガティブ少年が『向き合う』なんて、前向きな発言自体が珍しい。

彼もこの一年で色々な体験をし、心境が少しは変わったのかもしれない。

れない。

「そうよ。現実逃避したって仕方がない。こんな力がある以上、自分でどうにかしなくちゃならないの。だから、私はこんな姿になることを選んだ。髪が傷むのも気にしないで金髪に染めて、ちつとも可愛くない制服の着方をして、周りを遠ざけるような喋り方をする。そうすれば、勝手に向こうから『不良』なんてレッテルを貼ってくれるから、悔しさはまず解消されるの」

その痛々しい金髪も、本人にとって不本意に似合ってしまったという服装も、全ては周りから距離を置くための自己防衛だった、ということだろうか。

遠ざけられるより、こちらから遠ざけた方が傷つかないという考え方が。

「これが今の私にできる、精一杯の処世術。でも、雨宮の妹はそれができなかった。今の私たちみたいに、すぐ側に同じ悩みを抱えて共有し合える誰かがいなかったからよ。雨宮はその頃まだ超能力者じゃなかったから」

黒乃は神妙な顔つきで、隣の少女に視線を送った。

「おれには、黒羽ちゃんがいた」

「わたしには、純ちゃんがいた」

だから、二人はこれまでやってこれた。

一人で己の異常に思い悩み、押し潰されるようなことがなかった。だが、雨宮の妹には相談できる誰かがいなかった。同じ立ち位置で悩み合える仲間がいなかった。

自分だけが他人とは違う。

そのことに怯え、一人で負の感情を溜め込み続け、ついに壊れた。

「妹さんは、雨宮さんに相談しなかったんですか？」

「したわよ、壊れてしまっってからね」

「……」

「うつん、壊れてしまったからこそ、だったのかもね。もともと自分の弱い部分とか口にすることが苦手な子だったみたいだから。心配させることも、したくなかったんだろうし」

まるで、それではジレンマだと黒乃は思った。

「それから、どうなったんですか？」

「最初に言った通り、自分の頭がおかしくなってしまったんだと言って、ヒステリーに陥ったらしいわ。そうやって現実を拒絶することとで、自分の異常性を否定し、普通の人間だとごまかしたかったんだと思う。でも悲しいことに彼女はとうしようもなく、超能力者だった」

夢村は後ろを連れ添って歩く二人を、ちらりと一瞥した。

「だから雨宮があんな感じになってしまったのよ」

「あんな感じ？」

黒乃が不思議そうに首を傾げる瞬間が視界に映って、夢村は眉間

にシワを寄せた。

「あんだ、自分の疑問を忘れたの？ どうして私が、こんな暗い森の中でこんな暗い話をしないといけなくなったのか、思い出しなさいよ」

「あつ、ご、ごめん、雨宮さんの人間性だったよね！」

刺のある物言いをされて、黒乃は慌てたように涙目で言った。

「せめて中二病ってあげたら？」

夢村はわずかに疲れた声で、

「でさ、雨宮はそんな妹にどんな詭弁をのたまったと思う？ 『お前は異常なんかじゃない。いたって普通だ。だから安心しろ』。……言外にそう伝えるために、あのバカは自ら道化になった。『俺は正常だ。でも、お前と同じ自覚症状がある。お前と一緒に。何も違わない。よって、お前は俺と同じ普通の人間だ。おかしいところなんて、一つだってありはしない』。……そんな優しい嘘の続きを、有り得ない非日常の設定を、不器用な幻想を、妹のために話し続けた。いつでも、どこでも、彼は漫画の世界の人間を演じた。つまりは、そういうことよ」

妹の超能力と、雨宮が作り上げる妄想の産物、それを『同じ症状だ』と言って一緒にしたのだ。

黒乃は絶句のあまり足が止まりかけた。

彼が停止してしまうのを傍らの白瀬が腕を組んで阻止する。

「でも、どうしてあまみーは、今もあんな漫画の世界の人みたいな

の？」

「そ、そうだよ。だって、えっと……妹さんは亡くなってしまったんじゃない……」

黒乃は下から目線の探るような調子で夢村の後頭部に問いかける。すると、金髪少女は悠然とうそぶいた。

「あら、誰が亡くなった、なんて言ったの。勝手に他人を殺したらダメじゃん」

「はい？　だって、もうおれたちの世界にはいないって……」

黒乃はついさっき夢村が口にしたセリフを反芻する。

『でも、もうこの世——じゃなくて、あっちの世界には、いないんだよね』

黒乃が困った様相で考え込んでいると、夢村が淡泊な物言いで、

「べつに間違ったことは言っていないわよ？　この世界を私たちが観測してしまった以上、『世界』の定義は、私たちが住んでいたところだけとは限らなくなるでしょうが」

狐にでもつままれたような気分で、黒乃と白瀬は顔を見合わせた。

「ま、まあそうですね……、えっと、つまりどういことですか？」

「要するに、彼女は今日もなんとか生きてるってことよ。あまり健やかにとは言えないかもしれないけどね」

そう解き明かすなり夢村は初めて微笑して、自身の隣を歩く人物を見ると言わんばかりに顎をしゃくった。

黒乃と白瀬の視線がぎこちなくズレた先にいたのは――

「にししい。いやア、なんか恥ずかしいねエ、自分の過去を語られちゃうつてのはア」

ぼりぼりと頭を掻きながら、青白い頬をほのかに朱に染める、月島桜の照れ姿だった。

「え？ え？ まさか？ え？ ということ！？ え！？」

混乱が極まる黒乃の様子を窺った夢村が、ニヤリとしてやったり顔で振り向いた。

「そのまさかじゃん」

「だ、だって、苗字は？ 月島さんって、月島さんじゃないですか」

「そりゃ月島は月島なんだから月島でしょうよ」

何を言ってるのよあんな頭大丈夫？ みたいな眼差しを夢村に返された黒乃は、返答に窮してしまった。

そこで白瀬が横から、やんわりと助け船を出す。

「どうして兄妹で苗字が違うの？」

「ここからがまたフザけてる話でね、他人同然の、あの母親が再婚したのよ。それで雨宮と月島が邪魔だったんでしょね、全寮制の桜桜高校にブチ込んだの。で、その後に離婚よ。ほんと結婚と親に

なることをナメてるとしか思えないわ結婚は恋愛じゃないのよ自分たちの都合でくつついたり離れたりして子供はいい迷惑だっつーのクソが逝けばいいのに」

「せ、正論だけどクールになつてよ夢村さん」

「ええ、私はいつでも冷静よ、純。そんでバカ親はそれぞれ兄妹を引き取つたの。父方の方に引き取られたのが雨宮で、母方の方に残つたのが月島。その両親は財力にだけは困つてないみたいだったから、その後の寮生活は仕送りだけして放置つて感じ。今じゃ全然交流ないんでしょ？」

「にしい、少なくともこの世界にきてからは連絡取り合つてないねエ」

そりやそうだ、というツツコミは喉の奥に飲み込んだ黒乃。

「ほんとに複雑なんですね……ていうかお兄さんのこと、もっと心配しなくていいんですか、実の妹として」

「ああア、まア、神楽ちゃんもついてると思うしい、何だかんだ死なない男よオ、私の兄はア」

「ああ、なんだか一年も一緒にいるのに、おれはまだ皆のこと全然知らないみたいです。月島さんが肉親に対して、こんな薄情だったなんて」

「知らないのは、お互いさまだと思うけどねエ。純ちゃんのことだつてエ、黒ちゃんのことだつてエ、私は知らないよオ。そして二人のこともつと知りたいんだア、私はア」

ゆらゆらと左右へ不自然に、危なっかしく歩く月島が述懐した。
いつも何を考えているか分からなかった彼女が、そんなことを思っていたなど気づきもせず、ただ少し変わっているだけで避けていた節がある黒乃は、自分を深く恥じた。

身近な人間に無言で避けられるというのは、とても寂しくて傷つくことだと痛いほど知っていたはずなのに。

浅く唇を噛んで両手を握りしめる黒乃の横顔を盗み見た白瀬は、ふと思い立ったかのようにニコニコと満面の笑みを咲かせて、

「私も。私もツツキーサクちんのこと、もっと知りたいよ」

「そうかいイ？　なら仕方ないなア。それなら特別に教えてしんぜよオ」

「やったー！」

なにやら月島と白瀬の精神的な距離が、ここにきて急に縮まったらしい。

黒乃が月島とポジションを交換してやり、一つ前の列に移動する。後方の女子二人は無邪気に、しかし声のボリュームには気を遣いながら、互いの好きなデザートの話題に特攻して行った。

「ここはさ、いわば行き場を見失った超能力者たちの、駆け込み寺ってところなのかもね」

左隣に並ぶ夢村は唐突に、そんな比喻を言い出した。
そして、

「……あっ」

黒乃は少しだけ目を見開いて、何かを察した声をあげる。

「あんたも気づいた？」

「はい、気づきました。だから、雨宮さんはこんなヘンテコな部活の部長なんかやってるんですね」

「そ。ほんと、変わり者よね。どこから噂を聞きつけたのか、私の読心術を一発で見破ってね、このバカげた部活を創設するために協力しろ、なんて言い出したのよ。いい？ その時点で私まだ中学生よ？ あのバカ宮、すでに同じ高校を受験させること前提で話したのよ？ どう思う？」

迷惑そうに語っている時の夢村は、その言葉とは裏腹にどこか嬉しそうで、楽しそうだった。

超能力者が、生きやすい場所。

それは、最低条件として同じ超能力者がいる空間だけなのかもしれない。

だから、雨宮は妹の居場所がなかったから、他にも居場所を探している者たちを集めて、作った。

「夢村さんも雨宮さんに誘われて、桜桜高校を受験したんですね」

「まあね。私、家にも居場所なかったし、全寮制に魅力を感じただけよ。それに、ここにいる大半がそうでしょ？ 中学時代、志望校を決める前に雨宮に誘われたクチだと思ってたし」

照れ隠しのつもりか、ぶっきら棒に言って頬をかく夢村。

どうやら彼女にも女の子らしい一面があったようだ。

黒乃は不思議と心温まって、夢村をまじまじと遠慮なく見つめてしまった。

その視線に気づいた夢村が、顔つきを普段通りの不良みたいに引きしめて、そつぽを向く。

今のように普通に普通に笑ったなら可愛いのに、と黒乃が勿体なく思っている、片や夢村は夢村で、両者の間に流れる弛緩した空気感をこまかすように、つつけんどんに口火を切った。

「ああ、でも神無月先輩と霧墨。それに双子先輩も違うわね。雨宮が超能力者の会を結成するために行動を開始したのって、まさに私たちが受験戦争にもまれてる時だったし。霧墨はあれだけど、神無月先輩たちは一年先にすでに入学してたから」

「えっ。じゃあ雨宮さんは、あらかじめ神無月先輩たちがいる高校を調べ上げていて、そこを拠点にするつもりで、おれたちを誘ったってことですか？」

「そうとしか考えられないわ。あのバカ宮は、その黒子さんと協力して、神無月先輩たちがいる桜桜高校をアジトにする方針にしたのね」

二つ前の列に、存在感皆無な黒子さんが音もなく歩いていた。

彼、もしくは彼女の能力。

それは漠然とした力で、『諜報』というものらしかった。

何か分からないことを質問すると、必ず筆談で応答してくれるオカルト研究部の情報屋みたいな存在である。

それこそ諜報分野を司る忍者のような人で、気配の絶ち方から音の消し方まで、まるでカタギとは思えないサイレントの達人でもある。

「さっきは、あたかも両親に煩わしく思われた雨宮と月島が桜桜高校に無理やり入学させられた風なニュアンスで言ったけど、半分は

雨宮と月島の意味だった。そうよね、月島？」

「ん？ あア、まアねエ。黒子さんの情報提供でエ、桜桜高校に三人も超能力者が隠れているって聞いたものだからさア」

「そうだったんですか、初耳です」

「今日はニューイヤーが多いね、純ちゃん。ハッピーニューイヤーだね」

「うん、そうだね。たぶん違うけど、幸せな初耳だよ。……ねえ、月島さん？」

「何かなア、純ちゃん」

「おれも君のこと、もっと知りたい。機会があったら、おれともお喋りしてもらえるかな？」

「ハツハアー、もちろんさア」

けらけらと忍び笑いをもらす月島。

途端に彼女が年頃の普通の女の子に見えてきた。

その矢先、なぜか白瀬が薄笑いを浮かべて黒乃を凝視していた。その愛らしかった目が、凍てついている。

「ネエ、純ちゃん？ 浮気八嫌ヨ？」

「ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち！」

違うよ、というたった一言を伝えただけなのに、難儀なもので

黒乃の舌は震えて絡まりまくり、結局最後まで『ち』という発音しか出せなかった。

それでも短くない時間を共に語らい過ごしてきた恋人同士は、以心伝心の絆で繋がっている。

白瀬の双眸に宿っていた恐ろしい氷が解けて、平生バージョンの天真爛漫な元気っ娘の目に戻っていた。

ガタガタガタ！ と尋常ではないレベルで小刻みに体を揺らす黒乃に、白瀬が『寒いのか？ それとも怖いのか？ じゃあ温めてあげる！ 安心させてあげる！』とか言っつて、恋人の背中に飛びつく勢いで抱きついてる光景を、夢村と月島は距離を置いて日和っていた。

「あ、あれ、もしかして黒羽って実はヤンデレ？」

「みたいだねエ。いやア、意外な一面だア」

「あんだ、そんなこと言っつて……キャラ食われるわよ？」

「んー？ 何の話イ？」

∞ ∞ ∞

後方から微かに聞こえてくる、黒乃、白瀬、夢村、月島、四人の囁き話に神無月がやわらかく微笑んだ。

と、彼女の側近執事こと霧墨絵利亜が、妙にムスッとした面様で不平をもらす。

「こっちは、いい迷惑だよ。オカルト研究部なんて、お嬢さまの経歴にキズがつくだけだ」

「霧墨くん。それでも、私は嬉しく思っていますよ。雨宮くんが勧誘してくれるまで、私がどんな学校生活を送っていたか、あなたも知っているでしょう？ 孤独に慣れることなんて、ありませんよ」

霧墨はその時、神無月が着ている薄い着物の袖口から、ちらりと視界に映った白い包帯を見て、下唇をきつく噛んだ。

その仕草で悟ったのか、神無月は右腕に左手を添えながら、憂いを帯びた声色で、

「私は中学時代、この能力を完璧にコントロールできず、教室でクラスメイトたちとの会話中、前触れもない謎の発火現象を、この右腕から起こしてしまいました」

霧墨とて初めて聞く話ではない。

それどころか、桜桜高校の生徒ならば誰でも知っているくらいに有名になっている哀話だ。

「桜桜高校は神無月家や霧墨家のような、地元の間人も普通に入学するマンモス校でしたからね。私の右腕がいきなり燃え、あわや火事になりかけたという危険な事件の噂なんて、広がるのはあっという間でした」

ふいに神無月が立ち止まって、夜空の帳を仰視する。

星座による方角の確認だ。

二人の後ろに、まるで親鳥の背についていくカルガモの子供たちみたいに並ぶオカルト研究部メンバーも一度、足を止めて神無月の調整が終わるまで、おもいおもいに時間を過ごして待った。

その間も神無月は頭上を仰ぎ見たまま、傍らにいる霧墨に対して、歌うように口上する。

まるで、

「唐突に原因不明の炎を生み出してしまふ人間など、怖くて誰も近づかないのが道理です。彼らを責めてはいけません」

まるで。

自らの罪状を第三者に告白することで過去のあやまちを戒める、罪人のように。

「今でこそ、この能力を十中八九、掌握できるようになりましたが、それまでは私自身でさえ恐ろしくて目を背けていた力です。本人でさえそんな情けない身構え方なのに、他人ならもつと怖いでしょう。恐れるな、と言う方が理不尽だと思います」

霧墨は、敬愛する彼女にかけてあげられる言葉を必死になつて探していた。

一七年間、その脳みそに蓄積した、ありとあらゆる語彙を検索して、綺麗な文章に組み立て直そうとした。けれど。

「でも……ですよ、霧墨くん？」

結局は、いつも通り、彼女にそれを吐かせてしまふ。

おそらく、今の霧墨では、どれだけ多くのボキャブラリーを増やしても、同じ結末に至る。

「でも、私はあの時、ただ大切なお友達を守りたかっただけ、なんです」

知っている。

そんなことは他の誰よりも知っているし、彼女と同じくらいに悔

しく思っている。

神無月の右腕が発火した事件の真相は、彼女の『怒りという感情に抵触して暴走した超能力』によるものだ。

当時、彼女のクラスにはイジめを受けている生徒がいた。

一ヶ月に一度ほど定期的に行われるクラスの席替えがあつてから、神無月はその生徒と隣の席になつて、何かのきっかけで話すようになった。

彼女自身はイジめに加わるような人間ではなかつたし、そもそも『イジめの存在』にすら気づいていない立ち位置にいた。

良い意味でも悪い意味でも、その頃の神無月は今のよう鋭い観察眼も持つておらず、周囲の出来事に鈍感な、おっとりとしたお嬢様だつたのだ（皮肉なもので『あの時』があつたからこそ、現在の冴えた神無月が形成されている。少なくとも最初の要因になつてゐるだろう）。

そして、その生徒が受けている陰湿な嫌がらせも、傍から見たら察知しにくいものだつた。

いや、クラスメイトは薄々ながら気づいていたのだろう。

しかし、我関せずと素知らぬ顔をしていた。

誰だつて標的にはなりたくないのだから。

誰か他の人間が生贄にさえなつていれば、自分の身を守れるのだから。

ところが、そういうごく自然とも言える思考をしない生徒が一人、そのクラスには存在した。

悪いことを悪いと、当然のように糾弾できる勇気を持った生徒。

言うまでもなく、神無月玲だつた。

嫌がらせを受けている生徒をかばおうとして、イジめている側の生徒たちを告発し、激しい口論にまで発展した。

嫌がらせをしている証拠を出せたの、水掛け論が飛び交つた。

そうして、最終的にはイジめを受けている本人の口から真相を聞こうという流れになり、

『イジめなんて受けてません』

という言葉が飛び出して、神無月は啞然とした。

彼女には、その生徒の心理が理解できなかったかもしれない。

ここで『イジめられています』と主張したとして、安息の日々に戻れるとは思っていなかったのだ。

プライドだって、あったのかもしれない。

自分が嫌がらせを受けていることを、クラスメイト全員が見聞きしている前で認めることは、屈辱的だ。

そうして、学級裁判のような空気は、とてつもなくギスギスとした雰囲気で終了した。

と誰もが思った直後に、恐るべき現象が教室内に巻き起こり、悲鳴と怒号が重奏した。

目撃者の証言によれば、クラス会議終焉後に、原因不明の発火が生じたということだ。

奇跡的に怪我人はなかった。

神無月の右腕が大火傷を負った以外に、被害は出なかった。

彼女の退院後、教室内で神無月に向けられる眼差しの色が変わっていた。

恐怖の色、嘲りの色、無関心の色、同情の色。

様々な色と形が混在していたが、共通して言えるのは、あの日之境に誰も神無月に話しかけてこなくなったということだ。

それは入院中、霧墨や親族を除き、誰一人として見舞いにきてくれなかったことから予想はできていた。

そして、嫌がらせを受けていた生徒には、他の友人ができていた。

「……お嬢さま、安心してください」

霧墨は、苦虫を一〇〇匹くらい噛み潰して強引に飲み込んだかの

ような心の中の面持ちを表には出さず、つとめて毅然とした態度で言う。

「今のお嬢さまは一人ではありません。僕は認めていませんが、それでもあなたを信頼し、その背を支えるバカどもがいます」

背後を見ると、知り合って一年と少し、けれど人生の中で最も濃厚な時間を共有してきた者たちがいる。

「そう、ですね。今の私にはここにあります」

「はい」

そうやって首肯する霧墨自身は、他人にどう思われようと気にもとめない人間だ。

周りの人間に酷評されようと甘んじて受け入れる。

なぜなら、霧墨の中では神無月からの評価こそが絶対なのだから。それ以外の声は、情報としての価値や魅力を感じない。

ゆえに、だからこそ神無月の姿を通して思考すれば、孤独がつかいという感情にも到達できる。

神無月の悲しみは、イコール霧墨の悲しみなのだ。

彼にとつては神無月以外の人間関係など無視していいものだが、神無月自身はそういうわけにはいかない。

彼女が孤独に悲しむは、耐えられるものではなかった。

「そういうことなら、僕も雨宮に救われたうちの一人というわけか……チツ、忌々しい」

霧墨が横を向いて、ひとりごとのようにばやき、舌打ちをしていると、

「励ましてくれてありがとう、絵利亜くん」

「え？ あ、はい……い、いえ」

急に神無月の口調が親しげになつて、しかも昔みたいに下の名前で呼ばれたものだから、豆鉄砲を食つたハトよろしく霧墨が棒立ちして、主の顔を見つめ返した。

警戒心も何もかもを解除した、無防備な霧墨というのも非常に珍しい。

切れ長の瞳が少しだけ、ほんの少しだけ和らいでいた。

「さて、皆さん。小休憩もかねましたけど、そろそろ歩き出せますか？ 城下町まで、あとちょっとだと思うので、もう少しだけ頑張りましょう」

今の神無月には、問いかければ答えてくれる仲間たちがいた。

「うーおー」

もちろん、小聲で、ではあつたけれど。

第二章「動機の行方」

∞ ∞ ∞

「何が言いたい？」

「あ、いや、お客様の名前をですね」

「私の名か？ 『神の涙に選ばれし者』^{レイニー・チルドレン}だ。聞いたことはないか？
……いや、現代では廃れた古き伝説の呼び名だったな。この二つ
名を継承した経緯を語るには、二億と六千年前まで遡らねばなるま
い。忘れてくれ……」

「いや、だからお客様。二つ名とかではなく、ここに本名を記入し
ていただきたいのですが」

「なるほど、創造神より刻まれし魂の真名か。しかし、俺の闇など
知ってどうする。この呪われた名を耳にして生き残った者などいな
いのだぞ。無関係のあなたを俺の闇に巻き込みたくなどない」

「あの、お客様はここに宿泊なさりたいんですよね？ そのための
サインが欲しいだけなんですって。それがこの街の決まりなもので
すから」

「サイン……だと？ そんなものを要求するのは、悪名高き旅団『
^{ダイクエンジェルズ}悪魔の手先』だけだ。さては貴様、俺の筆跡から——」

「少し黙りたまえ雨宮」

「げばっ」

超能力少女・神楽坂凜のサイコネシスが雨宮にのど輪落としを繰り返した。

「すまない亭主。そこで気絶した男の存在は無視してほしい。コミユニケーション能力が欠如している可哀想な人間なんだよ」

「は、はあ……」

民宿『こつま亭』の亭主は、どうコメントすることが接客業を営む経営者として正しいのか判断しかね、とりあえず曖昧な愛想笑いで返答した。

フロントの床で白目をむいて横たわっている雨宮新道を、宿泊している他の客たちが併設されている食堂に向かう道すがら、汚いゴミでも見るかのような目を寄越して避けていく。

その間、神楽坂が雨宮に代わって筆を取った。

「亭主、これで良いかい？ アタシの名前なんだけれど」

「え？ あ、はい。けっこうでございます。チェックインは二名様ですね？」

神楽坂は横柄な態度で頷いて肯定する。

それでも亭主は、彼女がまだ会話のキャッチボールが成立する相手だと理解したのか、即座に接客用のスマイルを作り、

「では、こちらがキーになります」

カウンターの奥から部屋番号付きの鍵を取り出して、神楽に差し出した。

けれど切ないことに、受付けデスクが大きすぎて神楽坂の小さな手はキーに届かなかった。

「……すまないね、もう少し手を伸ばしてもらえると助かるよ。こちらも精一杯、背伸びはしているんだ」

「あ、はい。申し訳ありません」

両者が腕を必死に伸ばし合ってようやくキーの受け渡しが完了する。

「ご兄妹で観光ですか？」

「ああ、そんなところかもしれないね。ここは保護者の同伴がなくても宿泊など問題ないのかい？」

「ええ、規律的には。ただ少数ではあると思いますが」

「そうかい。それは好都合だよ」

微笑をのせた口調を余韻に残して、神楽坂は足元で気を失っている男の首根っこを掴み、引きずり出す。
階段でも容赦なく。

「ごゆっくりお過ごしくださいませ」

心の中では不審を確認しながらも、亭主の男は丁寧に頭を下げて、あまり見かけない肌と格好をしている奇妙な二人組を歓迎した。

∞ ∞ ∞

柔らかい温もりを全身で認識した瞬間、雨宮新道はゆっくりと瞼をひらいた。

「目が覚めたかい？」

ぼやけた視界の中心で、こちらを覗き込む水晶玉のような瞳と視線が絡まる。

その目の持ち主がすぐに神楽坂凜だと分かるや否や、雨宮は上半身を起こした。

どうやら彼はベッドの上に寝かされていたらしい。

「……」

「雨宮、どうして衣服の乱れを確認しているのかな？ よかったら理由を教えてくれるかい？」

「……いや、寝ている間に乱暴をされたのではないかと」

「アタシは暴漢じゃないけれど」

ナイフにも等しい切れ味の良い視線を向けられた。

雨宮はその眼差しから逃れるように顔を背け、室内を見回す。知らない木造の部屋だった。

二人が寝泊まりするには贅沢なくらい広いスペースが確保され、綺麗な内装をしている。

調度品も過不足なく、この宿泊施設を運営している者の姿勢の良さが窺える。

「ここはどこだ？　俺は……雨宮新道だ」

「樹海で誘いだした魔物たちを脅し、無理やり案内させた街の民宿さ。一番評判が良さそうだったから、ここにしようと思ったんじゃないか。マナから当面の旅費用は頂いているからね、宿泊代には困らなかったよ」

「……」

「ん？　なんだい気持ちが悪い。何をもしもじしているのさ」

神楽は訝しそくに眉をゆがめて、ベッドに座る雨宮を見下した。すると、雨宮が奥歯に物でも挟まっているかのような物言いで、こんなを言い出した。

「か、神楽は、ここで良かったのか、本当に。……その気があったのなら、もう少しロマンチックなところでも良かったんだぞ、わ、私はな。そして相手は、お、俺なんかで良かったのか？」

「は？　何を言ってるんだい、君は？」

「『一番評判が良さそうだったから、ここでしよう』などと……、神楽がそんな邪な基準で宿泊施設を選択していたとは、敏感な私とすることが気がつかなかった。しかし、すまない。俺はまだ心の準備が整っていない。先にシャワーを浴びてくるがいい。それとも一緒に？　そ、それは、さすがにまだ恥ずかしいってどうか——」

「逃げ」

知覚できない不可避のボディブローが、雨宮新道の懷に叩き込まれた。

瞬間的に、少年の全身が数ミリほどベッドから浮上する。

もちろん一発ケーオーである。

神楽坂のこめかみには青筋が浮かんでいた。

頬がひきつっている。

そして、一二歳くらいの愛らしい顔立ちに、小悪魔笑顔が張りついていた。

きらりと光る八重歯は、邪悪な時の神楽坂が降臨した証拠だった。彼女はベッドに飛び乗り、そこで悶絶する雨宮の背を小さな足で踏みつけて縫い留める。

「なるほどなるほど、そういう解釈をしたのかい、君は。オスの単細胞が炸裂しているね。そもそも、アタシは『一番評判が良さそうだったから、ここ』で『しよう』とは言っていないよ。『一番評判が良さそうだったから、ここ』に『しよう』だ。それを君は一体全体、どのような勘違いをしてしまったのかな？ 詳細を聞かせてくれるかい？」

「は、早とちりでした。すみません……すみません」

苦しげにうずくまる雨宮の口から平謝りの口状が述べられる。

それで少し気が晴れたのか、神楽坂はふいと目を離して苛立たしげに舌打ちした。

ただし、そのおみ足だけは雨宮の背骨に食い込んだままであったが。

「君は、そういう気持ちで誘われたら相手が異性なら誰でも良いのかい？」

「いえ、決してそんなことは……」

「なら、特定の条件さえ満たしていれば不特定多数でも構わないと？ そうだとしたら君は少々、自身のことも女性のことも軽視しすぎだと思っけねどね」

「うっ……」

「まあ、高校生にそれを言うのも酷だとは思っよ。性欲の塊。発情期な馬の耳に念仏だね」

情けなく呻く雨宮の背骨を解放しつつ、神楽坂はベッドから下りた。

ソファに腰かけて、プリーツスカートから伸びた短い足を組む。

眼前のローテーブルに手を伸ばし、紅茶を入れたティーカップに口づけした。

「エ、エージェント神楽よ。一つ、後の祭りの質問があるのだが」

「何だい。言ってみたまえ」

神楽坂は雨宮と目を合わさず、まだ怒っている雰囲気醸し出して促した。

「うむ。わざわざ魔物たちを捕獲してまで、この街の道案内をさせる必要はあったのか？ 神楽の念力で空を飛んでいけば良かっただろっ」

「愚問だよ、雨宮。それを成就するには、アタシの充電時間が不足している。無駄遣いはできないよ」

神楽坂凜の超能力——サイコネシスの行使には制限がある。

雨宮たちのような超能力者も、いつでもどこでも自由に力を扱えるわけではないのだ。

なにかしらの条件をクリアし、初めて超能力を発動できる。

それが神楽坂の場合は、睡眠時間だったというだけの話だ。

彼女が念動力を自在に発揮するには、最低でも六時間の睡眠が必要不可欠なのである。

ただし、それは連続でなくてもいい。

総計六時間の睡眠をとれているのなら、神楽坂は不可視の物理的効果を伴う現象を起こせるのだ。

また、総合六時間以上の睡眠によって、念力の精度も持続時間も上昇する仕組みになっている。

六時間の充電で大体、合計一時間はサイコネシスを使用できた。そこまで聞けば、別に大した制限ではないように思えるかもしれない。

ところが相性が悪いことに、神楽坂凜という小悪魔系少女は寝つきが悪い体質であつた。

ゆえに、この世界で調合した睡眠薬を常備している。

その上、タチが悪いことに目覚めも悪く、起きた時はかなり不機嫌なのだ。

雨宮たちは今、寢床を失った状況にある。

安心して眠れるのは、こうした民宿で泊まる時くらいだ。

だから、万が一の時のために、なるべく充電を節約しておく必要性があつたと神楽坂は言いたいのだろう。

「確かにそうだな。ならば仕方あるまい」

立ち直りがはやい雨宮は、不敵に破顔した。

そんな少年を神楽坂は横目で睨みながら、ほとほと呆れたように、

「君はとことん始末におえない人間だよ。超能力を持った中二病男ほど厄介な存在はいないね」

神楽坂の毒舌もスルーして、雨宮は訊ねる。

「それはそうと、他のメンバーとコンタクトは取れたか、エージェント神楽」

「君風に言つのなら否定だよ、^{ネガティブ}雨宮。電波のない世界は、本当に不便だ。携帯電話とは、とても有能な代物だったんだね」

「ふ、なくなつて初めて気がつく大切なもの、か。あつたな、私にもそうというのが」

遠い目で明後日方向を眺める雨宮。

その視線の先には、部屋の角があるだけだ。

神楽坂は吐息を吐いて、ソファで座る格好を正した。

そして、これまでにないくらい真面目な表情と声音を奏でる。

「そろそろ話してもらおうか、雨宮」

「何の話だ？」

「中二病全快の受け答えで、とぼけるつもりかい？ 神無月たちとわざとはぐれた理由に決まっているだろう」

神楽坂に鋭く指摘された途端、雨宮の面様も一変した。

「……気づいていたのか。お前はあの時、俺の背ですやすやと寝息

を立てていただろうに。はっ、まさかタヌキ寝入り……だと……？」

「いいや、その時、アタシは夢の中だったと思うよ。これは、ただの推測さ。そして今、アタシの考察が正しかったと半ば証明された」

「やるな、エージェント。ふふ、確かに私は、どさくさに紛れてメンバーたちと分離した」

「威張って言うんじゃない。その理由を吐きたまえ」

とは言え、それも大方の予想くらいいついているけれどね、と神楽坂は退屈そうな声のトーンで補足した。

雨宮は観念した様子でベッドから足を下ろし、

「いいだろう。ならば食堂で何か腹に入れながら、次のミッションのためにブリーフィングを開始するでしょう」

「ふうん。腹が減っては『戦』はできない、かい？」

何もかもを見透かした、濁りのない双眸を瞬かせて神楽坂は立ち上がった。

∞ ∞ ∞

真夜中だというのに、民宿『こつま亭』の食堂は宴会場と化していた。

多くの人間が顔を真っ赤にして意気揚々と酒をあおり、店の天井に投影されている空中ディスプレイ——雨宮たちの世界におけるテレビのようなもので、魔法による通信デバイスが虚空に四角いフレームを映し出しているのだ——を眺めて、好き勝手に騒いでいる。

この浮わついた空気の原因は、魔法理論による通信術式の枠内で流れていた。

今この世界をもっとも騒がせているニュースの映像。

世界で最後の魔王マナ・ファントムの世界同時中継の公開処刑。

その準備模様の生中継。

酔っぱらった人間たちは、魔王の死刑に喜び勇み、次々と酒を酌み交わしていた。

そんな喧騒の中、食堂の片隅で静かに食事をとっている少年と少女の姿がある。

少年の方、雨宮新道は天井付近で流れているニュース映像から、ふいと視線を外した。

「ああ、そのようだ。やはりこのままでは、我々のプロジェクトに綻びが生じ、いずれ全体に支障をきたすだろう。この波紋は看過できるスケールではない」

雨宮はわずかに顎をあげて、瞳を閉じながら一人で呟く。

脳内会議らしい。

「誰と話しているんだい？」

注文したパンとスープをちびちびと摂取する神楽坂が、真向かいから問うた。

「ん？ 第九番目の人格・フリージア・ルシファーだ」

「それならフリージア卿に、こう伝えてくれたまえ。これからアタシは雨宮と大事な話をするから、少し永遠に眠っていてほしいと」

束の間の沈黙。

いちいち演出にこだわる雨宮は、ややあつてから、やおら開眼した。

「……悪いな、神楽。お前を連れてきたのは、お前が俺のプロジェクトに口出しをしない優秀な人間だからだ」

神楽坂は小さく首肯し、

「確かに他人の決意を阻害する趣味は持ち合わせていないよ。アタシはそこまで暇人じゃあない」

「ああ、理解に及んでいる。だから、他のエージェントたちに伝えてほしい」

「他力本願かい？ 自分で伝えたまえ」

突き放すように神楽坂は囁いた。

しかし、雨宮の心は波立たない。

差し向かいに座る少女に、冷淡に接されたことも構わず、少年は芝居がかった態度で伝言の内容を短く唱える。

「必ず生きて元の世界に帰ってくれ、とな」

「はあ……じゃあ、訊くよ。君は何をするつもりなんだい？」

神楽坂は妥協を許したみたいに、疲弊混じりの物言いで雨宮を問い詰めた。

そんな彼女の生暖かい眼差しにもうつたえず、雨宮は当たり前のように答える。

——マナ＝ファントムを助けに行く、と。

食事の手を止めて、神楽坂は首を垂らし気味に左右へと振った。

「せつかく苦勞して、ここまで逃げてきたのに、君は自ら死地に舞い戻るのかい？ 笑わせてくれるね。飛んで火に入る夏の虫も聞いて呆れるよ」

「ふふ、寝言は充電中に言いたまえ、エーゲンツツ。逃げてきた？ それは違うな。これは戦略的撤退だよ」

神楽坂の瞳が細く見開かれた。

口調こそおだやかなものの、詰問じみて聞こえる言葉遣いで、彼女は質問する。

「君一人に、一体何ができるつもりなんだい？」

「……マナ＝ファントムが、俺たちにくれたことは忘れていない。一年前、この世界に漂流し、いきなり魔物に襲われかけていた俺たちを助けてくれたのは、彼女だ」

噛み合わない問答は続く。

「マナを助けられたとして、君はきつと全世界を敵に回すことになるんだよ？ その後のことはどうする。考えているのかい？」

「動機なんて後づけでいい。なんなら友情で構わない。魔王だか何だか知らないが、友達が絶体絶命のピンチならば、俺は助けに行く」

でなければ、後悔するから。

行動するための理由ばかりを考え、動くのが遅すぎて手遅れになることを、雨宮は知っているから。

「そうだ。マナは、俺の友達だ。それ以外に助けに行く理由はない。それだけで十分、この雨宮新道を動かす要素になる。動機になる。原因になる」

「結果的に、君も死んでしまつかもしれないよ」

神楽坂が淡白に可能性を提示すると、あろうことが雨宮は快活に笑った。

「何を言う、エージェント神楽。俺たちはすでに一度、死んでいるではないか。魔物に食い殺される寸前で、マナに救われた身。だから、この命は儲け物だと思い、彼女に拾われた人生を彼女のために懸けても、きっとバチは当たらないだろう」

理屈ではそうなるかもしれない。

言葉だけなら雨宮の論法は、おそらく正しい。

けれど、それを有言実行できる者がこの世界とあちらの世界に、どれほどいるのだろう。

そう考えてから、神楽坂は鼻で笑った。

「君はやっぱり狂っているよ。単細胞直情型無策特攻系中二病科霊長類さ」

こうして、二人の中では討論が完結する。
神楽坂もこうなってしまった以上、雨宮の意志が揺るがないことを知っているため、

「分かった。皆にはアタシから伝えておこう」

あっさりと手を引く。

それを確認した雨宮は大げさに頷いた。

「恩に着る。それでは達者でな、エージェント神楽。風邪をひくなよ」

オカルト研究部部长は、颯爽と立ち上がって、雑踏が溢れる食堂の出入り口へと消えて行く。

テーブルには神楽坂だけが残った。

彼女は皿を傾けて、一息にスープを飲みほす。

行儀が悪かったが、気にする人間なんていないだろう。

見た目の愛らしさに反して、他人の不幸を蜜の味と断言するほど腹黒く、黒い笑みがよく似合う美しい少女・神楽坂凜。

彼女は、他人の決意を邪魔立てしない。

たとえ、その決意とやらが危険なものだと理解していても。

仲間のよしみとして忠告こそするけれど、強制的に止めようとは思わない。

己の美貌を熟知しており、時にはその発展途上な体を活かした振る舞いで猫を被り、大人をまんまと騙したりする悪女は、自身の性格の悪さを自覚している。

その高飛車で底の知れない百面相の性格ゆえに、中学時代には友達が一人もできなかった。

そんな天の邪鬼の化身みたいな少女が、形のいい桜色の唇から、

ぽつりと独り言をテーブルの上に落とした。

「ああ、必ず伝えておくさ」

そして、悪女を悪女たらしめている不敵な笑みを浮かべる。

「『総員第一種戦闘配置。ミッションコードー〇四V——サルベージを発令。……これより、世界を敵にする』とね」

第三章「王室の空属と、海賊と、山族と」

世界最後の魔王マナ＝ファントムの処刑でもって宣言される、人間側の勝利。

夜明けの宴開催まで、残り数時間を切った。

通常ならば夜の常闇が支配している時間帯だがしかし、城下街の人間たちは寝静まらず、それどころかハメをはずして、興奮の感情が充満する前座を楽しんでいた。

まるで、目に見えない圧力から解放されたことの反動で、歓喜に狂ったように。

∞ ∞ ∞

国王軍のお膝下が、人間たちの笑い声一色に染まっている頃。

人間の王ガードレイ＝スターは、静謐に包まれた煉瓦造りの城内の——世界中から掻き集めた財宝を材料に建造した煌びやかな、王室にいた。

瞑想でもしているのか瞼をおろし、硬くて座り心地の悪そうな椅子に座っている。

鏡面じみた光沢を放つ金色のひじかけを利用して、頬杖をついていた。

六〇年もの齢を重ねてきた白髪の男だが、その双眸に衰えの兆しはない。

野心と支配に飢えた眼光をくすばせてはいるけれど、衣服の内側に鎧でも仕込んでいるかのように布を盛り上げる気力横溢な図体のイメージに相違して、二つの目に宿る炎の色は情熱的な赤ではなく、もつとも沈着する知的な青だった。

自身の利益と本能だけにつき従って動く人間が、誰かの上に立つ

ことは難しいだろう。

特に、一国を双肩に担ぐガードレイのような地位につくには、それ相応の技量と知識と器量と運と、その他大勢の人間を同時に味方につけなければ。

そして、彼は『魔物を恐れ嫌う大多数の人間たち』の支持を見事に獲得した王だ。

地位的に頂点に立つ人物を国の単なる象徴、玉座の飾りのように座視させている傀儡政権があったりするが、ガードレイは違う。

彼は時おり、やることなすことが破天荒で、ひとたび口を開けば唯我独尊的な発言を繰り返す。

民衆に対しては旨いエサをつけた釣り糸を垂らすかのように、夢物語にしてもひどい、しかし実現したら素晴らしいと思えるような目玉政策の結実を宣言したりして、王の座を継承した当初こそ民衆による批判の声も多かった。

ところが、ガードレイが打ち出した目玉政策の一つ——『魔王討伐作戦』の成就に近づく頃には、国民たちはもう手のひらを返していた。

国王ガードレイの不言壮語が、実は雲の上の幻想ではないことを確信し始めていたからだ。

胸のうちを駆け巡る動と静を首尾よくコントロールできる、黄金の冠をかぶった偉丈夫は、自身の實力では絶対に不可能だと断言できる事柄には触手を伸ばさない。

けれど、彼は最初から思考の放棄などしない。

少しでも可能性が見出せたのなら、その糸口から結果に繋げるための徹底的な計算を行う。

メリットとデメリットのバランスを円滑に演算し、それでも全力投資の末に国益になると判断したのなら、そこでようやく理論武装で固めた頭の回転から、物理武装による体の行使へ移行するのだ。

無論、損得の勘定によって毒を予見したならば、未練なく考察を絶ち切る。

そうして、誰もが不可能だろうと諦観していたガードレイの目玉政策は、着実にこなされていった。

質実剛健の国王自らが内政、外政のタクトを雄弁かつ的確に振つて。

今や国民から英雄視されているガードレイではあったけれど、何も彼一人で築き上げた成果ではない。

繁栄の未来を確固たるものに形作っているのは、王の優秀な眷属たちによる補助も多大な影響を与えているのだ。

「国王」

おごそかな姿勢で口を開き、静寂の空気を震わせた者がいた。

自身の立場をわきまえているような声は、玉座との距離を大幅に置いた室内の片隅で、妖しげにうごめく集団の中から生まれた。

一〇数名で編成されているガードレイ直属の護衛隊だ。

全員が全員、だぶだぶの分厚いローブで全身を覆い隠す魔法使いたちである。

国王ガードレイは、眠っているわけではなかった。

発言と共に一歩前へ歩み出た足音を耳ざとく認識し、ゆっくりと瞳の中に光をいざなう。

魔法使いたちの先頭に立った人影に視線を投じた。

「ん？　なんだ、シリユウ」

近年、このように碎けた調子で配下の言葉に応答する国王もいないだろう。

厳格さ、カリスマ性は備わっていても、ガードレイは礼儀作法や品といったものとは無縁な、軍人みたいな人間だったのだ。

「『彼ら』が到着したようでございます」

「そうか。構わん。ここに通せ」

「承知いたしました」

全体像の得体が知れない謎の魔法使いは、緩慢な所作で右手を自身の胸に添え、軽く会釈をしてから退き、護衛隊に紛れて消えた。そして一分もしないうちに、沈黙が下りた王室に新たな動きがあった。

「きたか」

ガードレイが誰にも聞こえない声量で呟くと、王室の巨大な扉が独りでに開いた。

玉座と入り口の間で一直線に敷かれている赤い絨毯。その上を臆する様子もなく、威風堂々と踏み締める影が三つ現れる。

一つ目は、そもそも人間のシルエットをしていなかった。

瘴気じみた闇色の水蒸気を全身から立ち昇らせる、呪われた四足獣が一体。

鋭角な二本の角と鋭いアギト、巨木みたいに太く、引きしまった手足と尾、それから一對の翼。

伝説に違わない輪郭から、それが以前どどういう生き物であったのか、想像するのは容易い。

けれど、その生命体には鱗がなかった。瞳がなかった。

ただ、ドラゴンの形をしている、漆黒の闇だった。

体を構成している霧状の内容物は、おぞましい魔法の呪いだっただが、呪いはドラゴンだけを蝕んでいるわけではない。

その背に、人間の上半身が融合している。

もちろん、そちらも闇に包まれていて、容姿はおるか性別すら判別できない。

空属 カース。

世界中の至る空域で散見されていた、神出鬼没の化け物だ。

彼らの存在と、『地対空迎撃術式魔法の高度化』によって、この世界からはほとんど空属稼業が消えていった。

呪いによって一体化した五体のドラゴンと五人の人間は、空を飛ぶ他者を許さない。

本能を司るドラゴンは、かつて自分たちを実験にかけて呪いをまとうせた、魔法使いたちへの怨嗟から。

理性を司る人間は、かつて空を愛したがゆえに封を解いてしまったパンドラの箱から、これ以上の犠牲者を出さないため。

二つの生命が結合し、二種類の想いが唯々諾々と混ざり合った結果、双方の見解の妥協点は、『空を飛ぶ人間は見境なく攻撃する』というものだった。

空で カース に敵う存在は、少なくとも人間の中にはいなかった。

ゆえに、空賊行為のために空を飛行したとしても、運悪く カース に遭遇してしまうと、圧倒的な強さでもって撃ち落とされる。

とは言え、彼らはまだこの世に五体にしか存在しない。

呪われたパンドラの箱は、現在も世界のどこかで開け放たれたままだけれど、今は彼らしかない。

世界中の空を偵察することは不可能だ。

だが、前述した通り、地対空迎撃術式の技術的向上によって、空賊は地上より正確無慈悲な魔法攻撃を受けてしまう。

以上が、この世から空賊業が廃れて行く主な原因だ。

もはや『空属』という単語は、この呪われたドラゴンと人間を意味する用語になっている。

序列があるわけでもないだろうが、五体いるうちの空属代表の一体が、今回は王室まで足を運んでいる。

そして、液体と気体の中間地点で留まっている暗黒色の魔法物質に、心も体も根元まで浸食されて続けている異形の隣で、二つ目の勢力が悠々と歩いていった。

法外的な力で海域の支配を目前に控えている、海賊 ベリアル
の船長だ。

まだ二〇代後半といった年齢だろうか、本当はもう少し若い青年なのかもしれないが、あごの無精髭のせいで少しだけ老けて見える。よれよれにになっている三角形の革帽子に、汚れが目立つバンダナ。

ウールのような素材で編まれているシンプルな長衣の下に、こちらにはリネン素材のような感触を得るストールベスト。

そして、袖が伸び切っていたり千切れたりしている、無地のVネックロングTシャツを、彼は着こんでいた。

牛革のメツシュベルトが巻きつけているのは、裾がスエードブーツの内側に仕舞いこまれているクロップ丈のサルエルパンツまがいのズボンだ。

左手の指にゴツゴツとした指輪、右手には何らかの魔法的術式を内蔵しているレザーの手袋と、プレスレット。

両耳に金色のピアス、首には黒い革のチョーカーと、小さなスカルのシルバーアクセサリー。

サルエルパンツのポケットからは、ウォレットチェーンが垂れている。

海賊の風貌をデフォルメしているかのように身を飾っているベリアル の船長は、アルコールが入っているのか、その頬には赤みがあつて、ニヤニヤとしまらない表情を作っている。

足元こそしっかりしているが、魔王を九体も葬った国王を前に、彼はあまりにも挑戦的だった。

不遜な態度は全身の歩き方からも滲んでいる。

最後に残った三つ目の勢力——山族 鬼姫 の現頭首イースリイ
ハザートは、肌の露出が激しい複雑な形状の着物から、衣擦れの

音を発しながら歩行していた。

その姿はゾツとするほどに妖艶で、人の視覚には暴力的かつ冷酷な美しさで映る。

彼女の一挙一動から生じる蠱惑的な美貌は、目にした者から老若男女問わず扇情的な気持ちを掘り起こすような、けれど触れれば刃物のように切れてしまいそんな危うさを内包している。

足元まで流されている長い黒髪は、戦場ではその瞳と同じように真っ赤に染まるという、鬼の一族。

着ている意味がなさそうな布を押し上げる豊満な双丘に、病的な白さの肌。

不動の国王ガードレイでさえも、イスリイが人間ではないと理解していながら、その絶世の魅惑に誘導される衝動を、ぎりぎりのラインで抑圧している状態だ。

何かの弾みがあつたら、心は簡単に取り込まれてしまうだろう。そうなれば、おしまいだ。

この国が乗っ取られてしまう。

ゆえに、彼女との接触、および契約は賭けであつた。

しかし、ガードレイはそれが不可能ではないと確信していたからこそ、行動に出たのだ。

四者四様のオーラをまとして、彼らは邂逅する。

人間の王は、自国の未来を栄光の先へ導くために。

空の異形は、魔法の呪いから解放されるために。

海の支配者は、海賊行為公認の書を授かるために。

秘境の鬼は、人間サイドに与することで自分たちの居場所を守るために。

それぞれの目的を心中に掲げて、ここに強大な勢力が集結した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1615ba/>

世界で最後の魔王が泣くとき。

2012年1月9日19時51分発行